県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

今津中原遺跡

2007.9

香川県教育委員会

県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

今津中原遺跡

2007.9

香川県教育委員会

序　　文

今津中原遺跡は香川県丸亀市今津町に所在する遺跡で、県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴い香川県土木部からの依頼により、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当として平成13年度に発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代後期と中世後半～近世を中心とする溝状遺構を検出することが出来ました。旧海岸線に近く旧河道が広がる低地部分の開発を試みた人々の様子を示す資料として貴重なものです。

整理作業は平成18年度に香川県埋蔵文化財センターが実施し、このたび『県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　今津中原遺跡』として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史を知るための基礎資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年９月

香川県埋蔵文化財センター
所長　渡部明夫

例　言

1．本報告書は、県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県丸亀市今津町に所在する今津中原遺跡（いまづなかはらいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路課から依頼され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（平成16年３月31日解散）が調査担当者として実施した。

3．発掘調査は平成13年４月～６月に実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

増井泰弘・小林明弘・中村文枝

4．現地での発掘調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

（順不同、敬称略）

香川県善通寺土木事務所（調査当時）、地元自治会、地元水利組合

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の執筆・編集は森格也が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は旧国土座標第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＤ　溝状遺構　　ＳＫ　土坑　　ＳＰ　柱穴・小穴　　ＳＸ　不明遺構

7．挿図の一部に国土地理院地形図「丸亀」（1／25,000）、国土地理院国土基本図「Ⅳ－ＦＥ26・36」（1／5,000）を使用した。

8．本遺跡の報告にあたっては、下記の機関にプラント・オパール分析を依頼した。

株式会社古環境研究所

9．本報告書の石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の周囲の実線のうち矢印のものは摩滅・擦痕・使用痕の範囲を、実線の先端部が矢印でないものは敲打痕の範囲を示している。

10．遺物観察表は以下の基準で作成している。

「残存率」は図化した部分についての残存率であり遺物全体に対するものではない。また口径が1/8以下、あるいは算出不能のものは「細片」と記している。

「色調」は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

「胎土」は含まれる鉱物・岩石の径と量を、以下の組み合わせで記載している。また特殊な鉱物・岩石については別途記載している。

微：径0.5㎜以下　　細：径0.6～1.0㎜　　中：径1.1～3.9㎜　　粗：径4.0㎜以上

多：非常に多く含む　　普：一定量含む　　少：少量含む

なお、磁器については「緻密」と記載している。

11．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高を示している。単位はメートルである。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第３節　整理作業の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第４節　調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２章　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３章　調査の成果
第１節　調査区の概要と土層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第２節　弥生時代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第３節　中世後半～近世の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第４節　包含層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第４章　自然科学分析
今津中原遺跡におけるプラント・オパール分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第５章　まとめ
遺構の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

挿図目次

第１図　遺跡位置図　・・・・・・・・・・　1
第２図　今津中原遺跡周辺図　・・・・・・　2
第３図　調査区位置図　・・・・・・・・・　3
第４図　今津中原遺跡周辺旧流路跡　・・・　5
第５図　周辺遺跡位置図　・・・・・・・・　6
第６図　Ⅰ区北壁土層図　・・・・・・・・　10
第７図　Ⅰ区南壁土層図　・・・・・・・・　11
第８図　Ⅰ区東壁・西壁、Ⅱ区西壁土層図・　12
第９図　Ⅱ区北壁土層図　・・・・・・・・　13
第10図　Ⅱ区南壁土層図　・・・・・・・・　14
第11図　Ⅰ区遺構平面図　・・・・・・・・　15
第12図　Ⅱ区遺構平面図　・・・・・・・・　16
第13図　遺構断面位置図　・・・・・・・・　17
第14図　ＳＤ01断面図、出土遺物（１）・・　18
第15図　ＳＤ01出土遺物（２）　・・・・・・19
第16図　ＳＤ01出土遺物（３）　・・・・・・20
第17図　ＳＤ02断面図、出土遺物　・・・・21
第18図　ＳＤ03断面図、出土遺物　・・・・22
第19図　ＳＤ04断面図、出土遺物　・・・・23
第20図　ＳＰ07平・断面図　・・・・・・・24
第21図　ＳＸ01平・断面図　・・・・・・・24
第22図　ＳＫ01平・断面図　・・・・・・・25
第23図　ＳＤ05・06・07・08・09断面図
　　ＳＤ05・06出土遺物　・・・・・・・26
第24図　包含層出土遺物　・・・・・・・・27
第25図　ＳＤ03地点のプラント・オパール分析
　　結果　・・・・・・・・・・・・・・32
第26図　ＳＤ04地点のプラント・オパール分析
　　結果　・・・・・・・・・・・・・・33
第27図　プラント・オパールの顕微鏡写真・・34
第28図　遺構変遷図　・・・・・・・・・・36

図版目次

図版１　調査区遠景　西から　遠方に丸亀城
　　調査区遠景　北東から　遠方のため池
　　は先代池
図版２　Ⅰ区全景　調査前半段階　南から
　　Ⅰ区全景　調査後半段階　南から
図版３　Ⅱ区東半部全景　北から
　　Ⅱ区西半部全景　北から
図版４　Ⅰ区北壁土層　南東から
　　Ⅱ区北壁土層　南東から
図版５　ＳＤ01・02全景　調査前半段階　東から
　　ＳＤ01・02・03　南西から
図版６　ＳＤ03全景　東から
　　ＳＤ03全景　西から
図版７　ＳＤ03土層断面Ａ－Ａ´　東から
　　ＳＤ03土層断面Ｂ－Ｂ´　東から
図版８　ＳＤ03土層断面Ｃ－Ｃ´　東から
　　ＳＤ03土層断面Ｃ－Ｃ´近景　東から
図版９　ＳＤ04・05全景　東から
　　ＳＤ04土層断面Ａ－Ａ´　南から
図版10　ＳＤ04土層断面Ｂ－Ｂ´　南から
　　ＳＤ09全景　西から
図版11・12　出土遺物

表目次

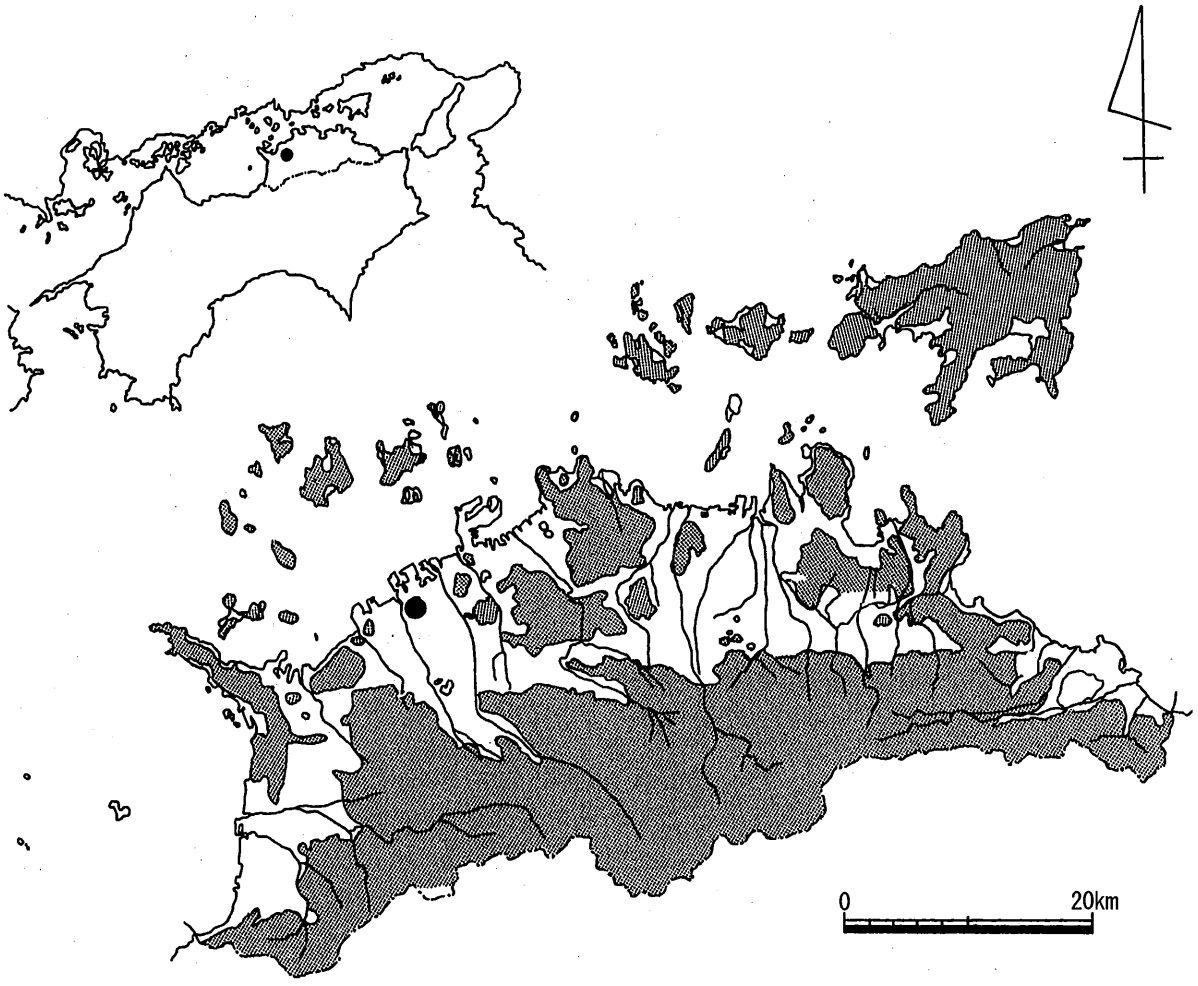
第１表　弥生時代小穴一覧　・・・・・・・・21
第２表　近世小穴一覧　・・・・・・・・・・27
第３表　香川県　今津中原遺跡におけるプラン
　　ト・オパール分析結果　・・・・・・・31

第１章　調査に至る経緯と経過

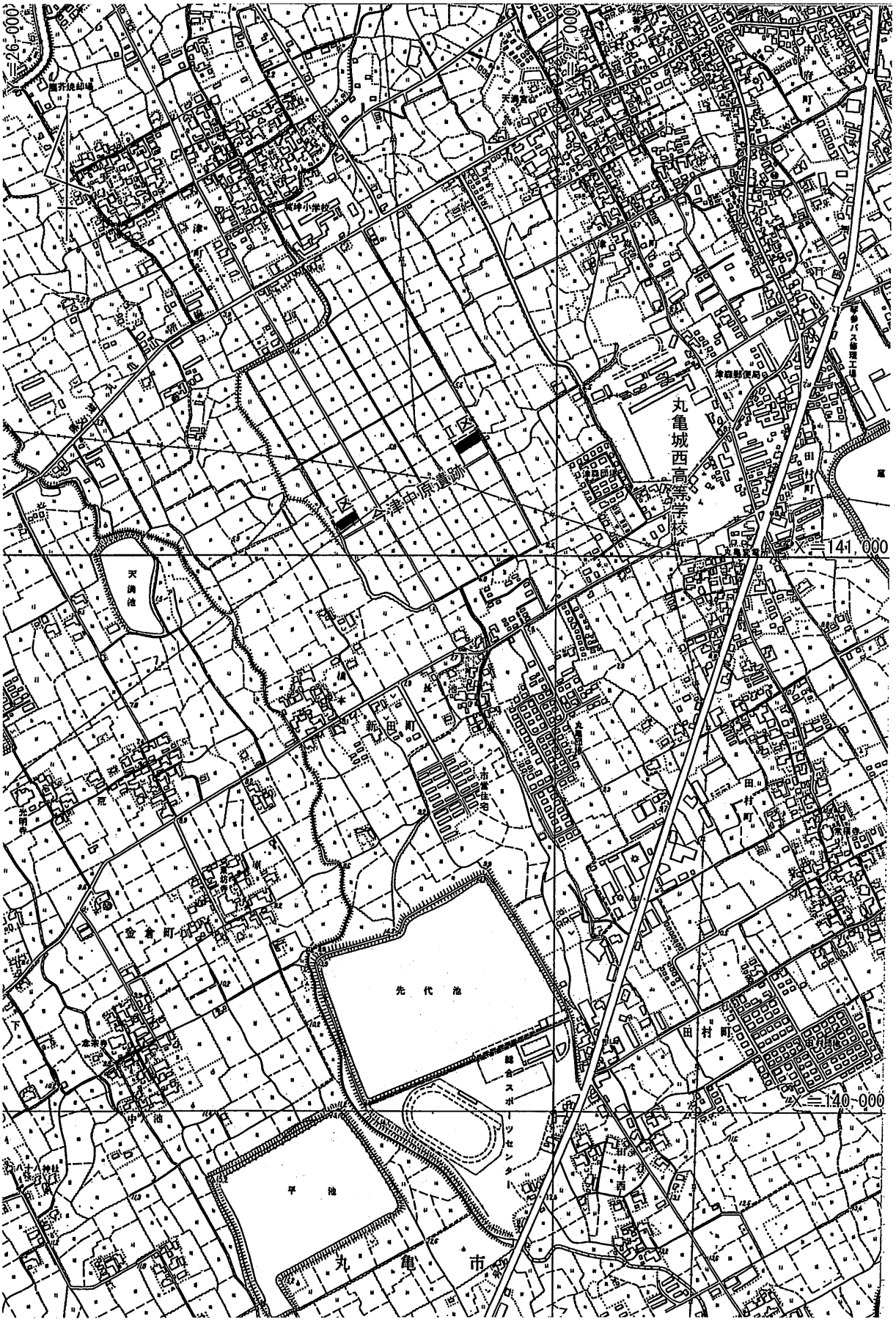
第１節　調査に至る経緯

昭和63年の瀬戸大橋と平成３年の四国横断自動車道善通寺～高松間の開通により、香川県の中讃地域では高速道路にアクセスしたり、国道11号などの幹線道と周辺の市町及び市町間を結ぶ道路網の整備や改良が急がれていた。このような状況の中で丸亀市と仲多度郡多度津町を結ぶ新規路線として県道多度津丸亀線の整備が計画されたのは平成元年度であった。香川県教育委員会では路線予定地の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するために、周辺の遺跡の分布や対象地の地理的環境を加味しながら、必要箇所について適宜試掘調査を実施していった。最初に事業が進捗した丸亀市金倉町部分では路線予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である道下遺跡が所在していたため、遺跡の内容を確認するために確認調査を平成元年12月に実施した。その結果、弥生時代後期を中心とする遺構・遺物を検出したため、文化財保護法に基づく事前の保護措置として、発掘調査を平成２年度に実施した。

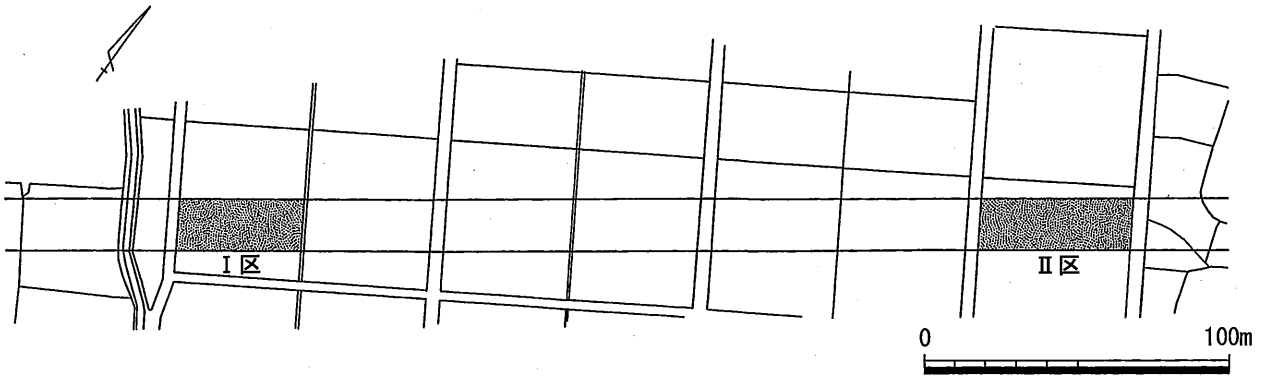
再び事業が進捗したのは平成11年度で、丸亀市今津町の西汐入川と県立丸亀城西高等学校の間の800mほどの区間であった。香川県教育委員会では埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するために対象地の試掘調



第１図　遺跡位置図（1/600,000）



第２図　今津中原遺跡周辺図（1/10,000）



第３図　調査区位置図（1/2,500）

査を平成12年１月と10月に実施したところ、対象地の中央部と東部で溝状遺構と弥生土器を検出し埋蔵文化財包蔵地を確認した。試掘調査の結果を受けて香川県教育委員会は香川県土木部道路課と埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて協議したところ、工事施工の前に発掘調査を実施することで合意した。なおこの埋蔵文化財包蔵地は「中原遺跡」として周知したが、平成12年度に高松市上林町から三谷町にかけての県道中徳三谷高松線建設事業に係る試掘調査により周知された「中原遺跡」と同名であり、発掘調査も両者とも平成13年度に実施することなり混同するおそれが生じた。そのため平成13年度になって、今回報告する埋蔵文化財包蔵地を「今津中原遺跡」、後者を「三谷中原遺跡」と遺跡名を変更した。

発掘調査は香川県教育委員会を調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当として、平成13年４月１日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を両者の間で締結して実施した。発掘調査期間は平成13年４月～６月、発掘調査面積は1,530㎡である。

第２節　調査の経過

調査区は東西に２ヶ所あり、西側をⅠ区（670㎡）、東側をⅡ区（860㎡）と命名して発掘調査を行った。４月に事務所設営や安全柵の打設を行った後に、遺構密度や広がりを把握するための予備調査から発掘調査を開始した。その後、機械により表土等を除去し遺構検出を行った。発掘調査はⅠ区とⅡ区を同時に進行させ、調査の迅速化と効率化を図るために航空写真測量を導入し、５月30日と６月22日に実施した。６月27日から調査区の埋め戻しを行い、６月30日に発掘調査は終了した。

第３節　整理作業の経過

平成18年度の発掘調査予定では、小規模調査を担当する調査班は10月～12月の予定で坂出市文京町二丁目西遺跡の発掘調査を行い、１月～３月でその整理作業・報告書作成を行う予定であった。ところが文京町二丁目西遺跡の調査対象地の家屋が未退去のままで、発掘調査を実施することが不可能となった。そのため香川県教育委員会事務局文化行政課と10月以降の小規模調査班の事業について協議したところ、同じ香川県土木部事業で平成13年度に発掘調査を実施した今津中原遺跡の整理作業・報告書作成作業を実施することとなった。今津中原遺跡は職員１名＋臨時職員６名の体制で、平成19年度以降に２ヶ月の整理期間で実施する予定であった。しかし急遽年度途中から調査課の小規模調査班がそのまま整理作業を実施することとなったため、通常の整理体制を組むことが出来なかった。小規模調査班の体制は職員１名＋嘱託（調査技術員）１名＋臨時職員１名であり、通常の整理作業体制の半分以下の陣容であった

ため、整理期間を予定の２ヶ月から６ヶ月に延長して、平成18年10月～平成19年３月の予定で実施した。

今津中原遺跡は平成13年度に派遣教員２名＋嘱託（調査技術員）１名の体制で発掘調査を実施した遺跡である。調査担当者はすでに学校に異動しており、整理担当者は発掘調査現場を見たことがなかったため遺跡の内容の把握から始め、残された図面や写真、メモなどを基に整理作業を実施した。

出土遺物の洗浄は発掘調査時に終了させていたので遺物の注記作業から開始したが、注記作業は埋蔵文化財センターで資料普及課の協力により平成18年９月に実施した。そのため実際に整理作業を開始した10月には接合作業から行うことが出来た。その後、遺物実測、遺構・遺物図面のトレース、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆、編集を行い、３月31日にはすべての整理作業を終了した。

第４節　調査体制

発掘調査、整理作業は以下の体制で実施した。

＜平成13年度＞　発掘調査

香川県教育委員会文化行政課

総　括	課　長	北原和利
	課長補佐	小国史郎
総　務	副主幹	中村禎伸
	主査	須崎陽子
	主事	亀田幸一
埋蔵文化財	副主幹	大山真充
	主任	西岡達哉
	文化財専門員	古野徳久
	文化財専門員	宮崎哲治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括	所長	小原克己
	次長	川原裕章
総務係	参事	河野浩征
	副主幹	大西誠治
	係長	多田敏弘
	主査	山本和代
調査係	参事	梅木正信
	主任文化財専門員	廣瀬常雄
	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	増井泰弘
	主任技師	小林明弘
	調査技術員	中村文枝

＜平成18年度＞　整理作業

香川県埋蔵文化財センター

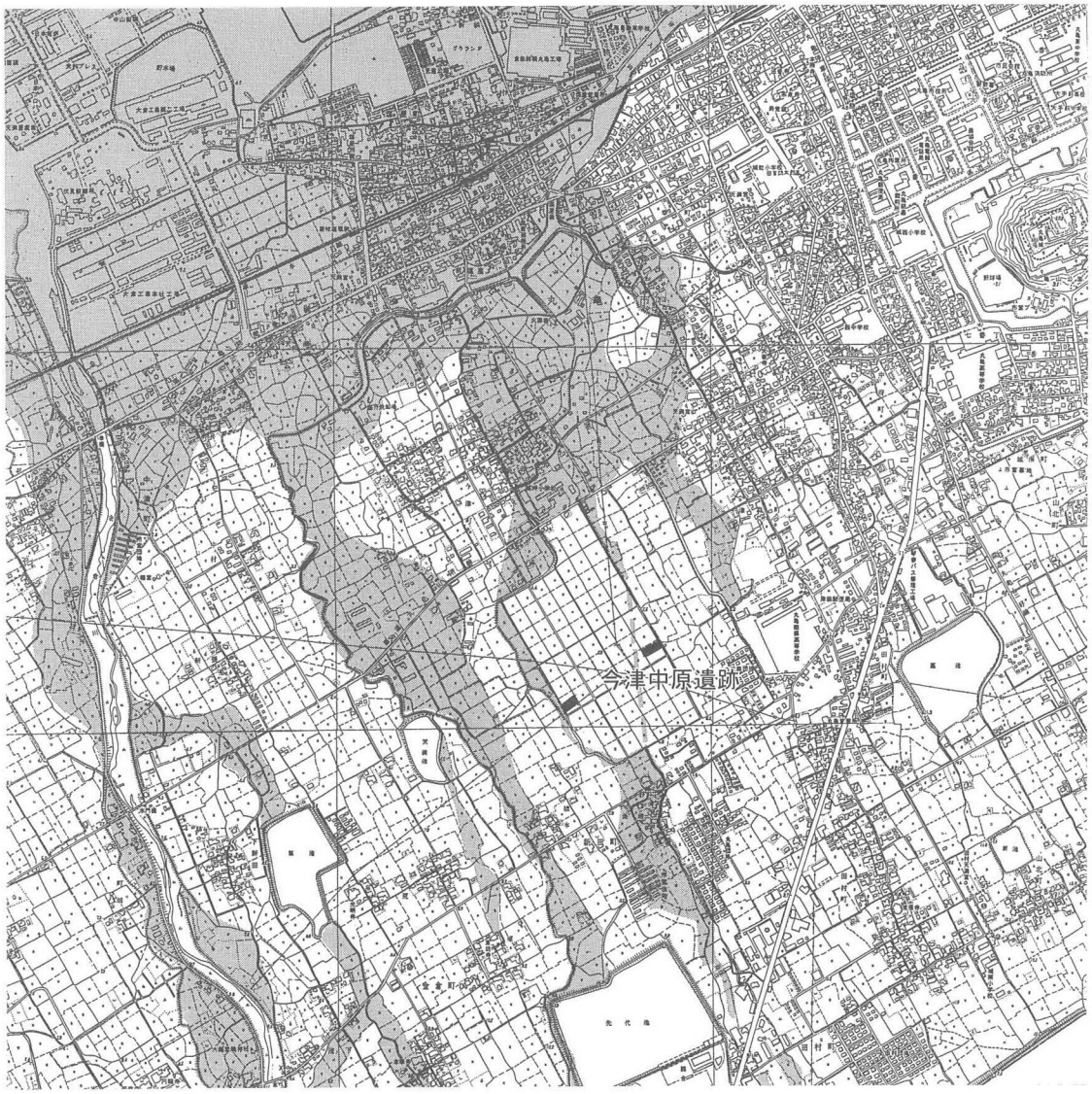
総　括	所長	渡部明夫
	次長	榊原正人
総務課	課長	野口孝一
	主任	嶋田和司
	主任	田中千晶
調査課	課長	廣瀬常雄
	文化財専門員	森　格也
	嘱託	八木國裕

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

丸亀平野は中央部に１級河川である土器川、東部に大束川、西部に金倉川があり、これらの河川の氾濫と堆積により形成された県下でも最大級の沖積平野である。今津中原遺跡は土器川と金倉川の間にあり、現在の海岸線から約２kmのところに位置している。また遺跡の西側約300ｍのところには小規模河川である西汐入川が流れている。遺跡の地表面の標高は5.3m前後である。

金倉川は現在は遺跡の西側1.2kmのところに位置しているが、巨視的に見ると西汐入川も金倉川の支流のひとつである。この金倉川は流路を幾度も変えながら瀬戸内海に注いでおり、埋没した河川跡が多く確認できる。特に今津中原遺跡付近では現在の西汐入川部分を含めた旧流路が枝状に広がっており、瀬戸内海に注ぐ直前の地域であり氾濫を繰り返していた。旧流路以外の部分も低地帯が広がり開発が困難な地域であった。旧海岸線は県道丸亀詫間豊浜線の旧道付近で、今津中原遺跡からは1.2kmの至近距離にある。しかし遺跡の東から南にかけて0.7～１kmほど離れると安定した微高地も現れ、その微高地上を中心に弥生時代前期以降に集落が営まれるようになる。



第４図　今津中原遺跡周辺旧流路跡（1/20,000）

第２節　歴史的環境

今津中原遺跡は丸亀平野の北端部に位置していることから、ここでは今津中原遺跡の所在する地域の歴史的環境を理解するために丸亀平野の北半部の地域について概観する。

所在する丸亀平野の歴史は旧石器時代に遡る。丸亀平野の中央部を東西に横切る四国横断自動車道関連の発掘調査により旧石器が出土している。三条黒島遺跡では旧石器のブロックが検出され、角錐状石器・削器などの石器類や石核・剥片・砕片などが出土している。出土旧石器には接合資料も含まれ、具体的に剥片剥離の工程・技術を示すものとして注目される。三条黒島遺跡の東方約1．5㎞のところに位置する郡家田代遺跡でも旧石器ブロックが検出されるとともにナイフ形石器・スクレイパーなどの石器類や石核・翼状剥片を含む剥片・砕片などが出土している。

1．今津中原遺跡　2．道下遺跡　3．津森位遺跡　4．中津城遺跡
5．中の池遺跡　6．平池西遺跡　7．平池東遺跡　8．平池南遺跡
9．田村池遺跡　10．三条黒島遺跡　11．郡家原遺跡　12．郡家一里屋遺跡
13．郡家大林上遺跡　14．郡家田代遺跡　15．川西北・原遺跡　16．川西北七条Ⅰ遺跡
17．川西北・七条Ⅱ遺跡　18．川西北・鍛治屋遺跡　19．飯野東二瓦礫遺跡　20．田村城跡
21．田村遺跡　22．田村廃寺跡　23．丸亀城跡　24．吉岡神社古墳
25．青ノ山５号墳　26．青ノ山４号墳　27．青ノ山６号墳　28．青ノ山１号墳
29．青ノ山７号墳　30．青ノ山３号墳　31．青ノ山２号墳　32．青ノ山９号墳
33．青ノ山８号墳　34．青ノ山１号墳　35．青ノ山宇多津２号墳　36．青ノ山宇多津５号墳
37．庄八尺遺跡

第５図　周辺遺跡位置図（1/50,000）

また郡家田代遺跡の西側に隣接する郡家大林上遺跡では包含層からナイフ形石器・翼状剥片・石核が出土している。

縄文時代では草創期の有茎尖頭器が郡家原遺跡と郡家一里屋遺跡で出土している。しかしその後縄文時代の遺物が見られるのは縄文時代後期になってからである。今津中原遺跡の南西約1.5kmのところに位置する平池南遺跡では自然河川から縄文時代後期と晩期の土器、晩期の石器・木製品が出土している。また遺構としては晩期の土坑を検出している。平池西遺跡でも晩期の土器が出土している。

弥生時代では先述した平池南遺跡で前期後半～末、後期を中心とした遺構・遺物を検出している。特に後期の溝状遺構から青銅製鋤先が出土したのが注目される。この平池南遺跡の北約0.3km、今津中原遺跡の南西約1.2kmのところに位置する中の池遺跡では前期後半～末を中心とする多重に環濠を巡らせた集落と水田跡を検出しており、多量の土器と石器が出土している。平池西遺跡でも前期後半の土坑、溝状遺構を検出し、土器・石器が出土している。平池東遺跡では前期の溝状遺構を検出している。上記のように平池の周辺には旧流路の間の微高地を中心に弥生時代前期後半を中心とする集落群が展開しているのである。これに対して今津中原遺跡の西約0.7kmのところには前期と後期の溝状遺構を検出した道下遺跡が、南東約1.5kmのところには後期の溝状遺構を検出した田村池遺跡がある。一方、丸亀平野の中央部の郡家原遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡や溝状遺構とともに多量の土器が出土している。

古墳時代の集落としては、郡家原遺跡で古墳時代後期～終末期にかけての竪穴住居跡と掘立柱建物跡を検出している。東側に隣接する郡家一里屋遺跡でも同時期の掘立柱建物跡を検出している。古墳では土器川東岸の青ノ山から派生する丘陵の南端部に前期の前方後円墳である吉岡神社古墳がある。全長51mで、後円部に長さ5.5ｍの長大な竪穴式石室が築かれている。副葬品として銅鏃、鉄鏃、刀子、管玉、勾玉、壷形土器が出土している。なお江戸時代以前に盗掘を受けた際に筒形銅器も出土したと伝えられている。丸亀平野では今のところ中期の古墳は見つかっていない。後期の６世紀後半以降になると横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が青ノ山山塊に次々に造営される。この青ノ山古墳群は青ノ山１号墳～９号墳、青ノ山宇多津２号墳・５号墳とその他数基の古墳があり、山頂・北麓（室塚）・西麓・南麓の支群に分けられている。このうち青ノ山６号墳と８号墳の石室は、横長の玄室とその短辺となる側壁からそのまま羨道が取り付き、全体でＬ字形になる特異な平面形態である。青ノ山５号墳～９号墳、青ノ山宇多津５号墳の発掘調査が実施されているが、このうち青ノ山６号墳からは須恵器・土師器・鉄製武器（大刀、鉄鏃）・馬具（鏡板、銜、引手、辻金具、兵庫鎖、鋲具）、玉類（管玉、ガラス小玉）など豊富な副葬品が出土している。この青ノ山山塊南麓の斜面に６世紀末～７世紀前半にかけての須恵器を生産した青ノ山１号窯跡がある。地下式の登り窯で、焼成部が残存しており、残存長は6.7ｍである。現在は県指定史跡として整備されている。

古代では今津中原遺跡周辺は那珂郡柞原郷に属していた。第１節で述べたように旧海岸線に近く、今津中原遺跡の北東1.5kmほどの丸亀市津森町宮浦付近から今津町にかけては大規模な旧流路が瀬戸内海に注ぎ込む河口部分で、柿本人麻呂が万葉集で詠んだ歌の中で「中乃水門」と考えられている地域である。「中乃水門」とは那珂郡の港という意味で、港を表す「津」という言葉が津森町や今津町という地名として残っている。古代の遺跡としては丸亀平野の中央部であるが郡家原遺跡で掘立柱建物跡を多数検出している。３群に分かれているが、いずれも建物の方向や棟数がほぼ同じになっている。墨書土器・緑釉陶器・斉串の出土が注目される。郡家一里屋遺跡では緑釉陶器と灰釉陶器が量的に出土している。また条里地割を反映すると考えられる溝状遺構が郡家原遺跡、郡家一里屋遺跡、郡家大林上遺跡、郡家田代遺跡、川西北・鍛冶屋遺跡で検出している。丸亀平野の条里地割は真北から30°ほど西偏する方向を主軸方位として施工されており、古代の官道である南海道を基準としている。条里地割やその呼称の

復元研究によると、今津中原遺跡は那珂郡三条二十三里三十二～三十五坪の位置に相当する。しかし今津中原遺跡の所在する部分は昭和三十年代に圃場整備が施行されているとともに、周辺も旧流路の氾濫原で開発が近世まで及ばなかったことから、現状で条里地割は残存していないか不明瞭になっている。今津中原遺跡の東約0.4kmのところ位置する津森位遺跡、南東約0.6kmの田村遺跡では掘立柱建物跡を検出している。また田村遺跡では平安時代後期の梵鐘を鋳造した遺構を検出しており、梵鐘の鋳型が出土している。田村遺跡の東側から南東側に隣接して田村廃寺がある。現在、田村遺跡の西側の番神社境内には田村廃寺の塔心礎があるが、これは動かされたものと考えられている。南東側には「塔の前」「塔の本」「ゴンゴン堂」「瓦塚」「舞台」「塚タンボ」などの地名が残っており、古くから古瓦が採取されるなど田村廃寺が存在したことを伺わせてきた。田村遺跡の東側の隣接地の発掘調査では、田村廃寺の平安時代段階の北側と西側の寺域を画すると考えられる築地塀跡と側溝を検出している。このほかに大型の掘立柱建物跡を検出しているが、全体の伽藍配置などは不明である。遺物としては白鳳～平安時代の軒丸瓦を含む瓦類が多量に出土し、鴟尾片や硯も出土している。

中世になると今津中原遺跡の所在する古代の那珂郡柞原郷周辺には、太政官便補地柞原庄と興福寺領柞原野庄が成立している。今津中原遺跡の周辺でも津森位遺跡で掘立柱建物跡を検出している。また田村遺跡、道下遺跡でも溝状遺構を検出しており、土地開発を行っていたことが分かる。丸亀平野中央部でも郡家原遺跡、川西北・七条Ⅱ遺跡、川西北・鍛冶屋遺跡で掘立柱建物跡を検出し集落が展開している。また飯野・東二瓦礫遺跡では溝状遺構を巡らせた屋敷と、その内部で掘立柱建物跡を検出している。戦国時代になると中津城跡、田村城跡などの平地城館が築かれている。中津城跡は明治時代の地籍図や航空写真により方形に巡る堀跡と考えられる痕跡が認められる。田村城跡も明治時代の地籍図には堀跡の一部と考えられる痕跡が認められるとともに、昭和初期まで「蓮堀」と称される堀跡があった。

慶長二年（1597）から七年にかけて生駒親正により築城され、子の一正の居城となった丸亀城は、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となる。寛永十七年（1640）の生駒騒動による生駒氏の転封後に丸亀城は山崎氏により再建され、その後万治元年（1658）に京極氏に引き継がれる。現存する丸亀城の大部分は山崎期・京極期のものであるが、石垣の一部については石垣修理工事の際に石垣内部から慶長期以前と考えられる野面積みの石垣が見つかっている。現在の丸亀市中心部は丸亀城の城下町として栄え、丸亀城の天守閣は現在も丸亀市のシンボルとなり、城内は市民の憩いの場として親しまれている。

＜参考文献＞

『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会　2003

『香川県埋蔵文化財調査年報　平成６年度』香川県教育委員会　1995

『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』香川県教育委員会　1996

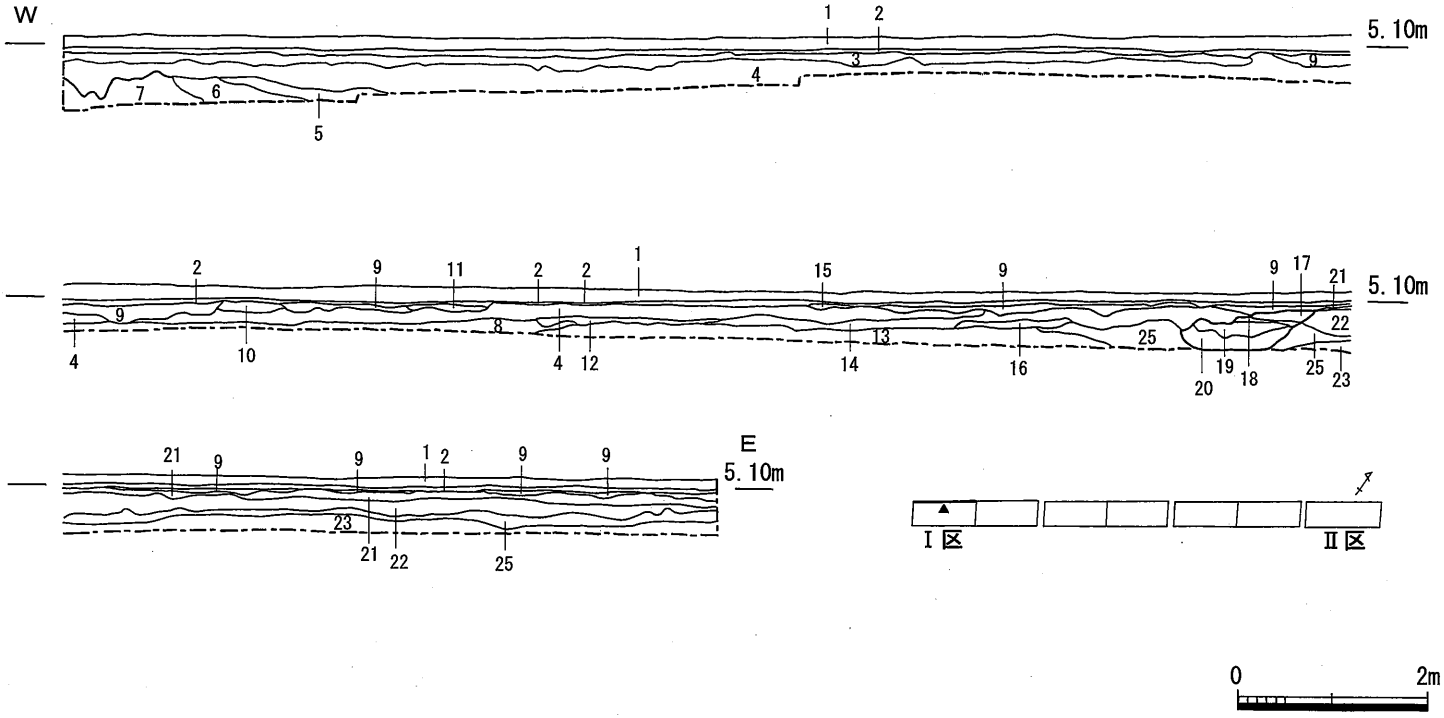
『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』香川県教育委員会　1997

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十二冊　郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1993

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十三冊　郡家原遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1993

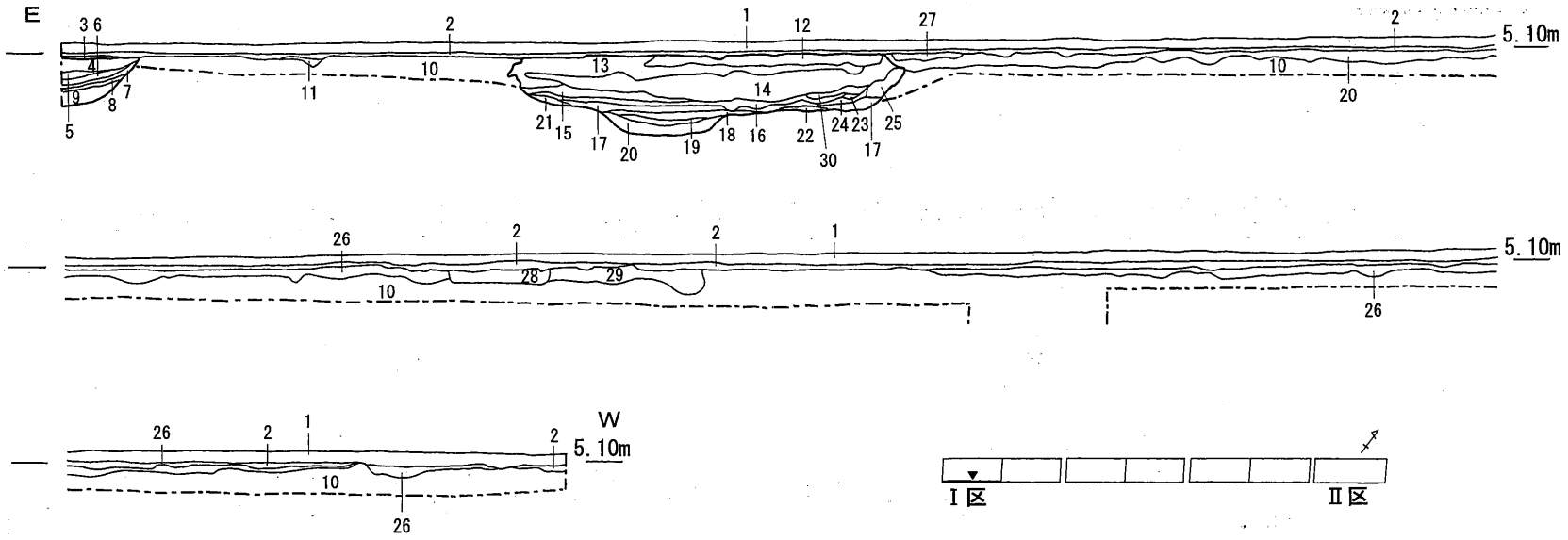
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十七冊　郡家大林上遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十冊　飯野・東二瓦礫遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十二冊　川西北・七条Ⅱ遺跡　川西北・鍛冶屋遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十四冊　郡家田代遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十七冊　三条黒島遺跡　川西北七条Ⅰ遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十五冊　川西北・原遺跡　府中地区』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　2000
『県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　道下遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1991
『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　田村遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　2004
『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度　平池南遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度　平池南遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996
『中の池遺跡発掘調査概要』丸亀市教育委員会　1982
『中の池遺跡Ⅰ』丸亀市・松本考古学研究所　1998
『中の池遺跡Ⅱ』丸亀市・松本考古学研究所　2000
『中の池遺跡　第8次調査』丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所　2003
『中の池遺跡　第９・10次調査』丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所　2004
『中の池遺跡　第11次調査』丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所　2005
『中の池遺跡　第12次調査』丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所　2006
『青ノ山６号墳号調査報告』丸亀市教育委員会・香川県教育委員会　1977
『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』丸亀市教育委員会　1980
『青ノ山８号・９号墳発掘調査概報』丸亀市教育委員会　1984
『青ノ山宇多津５号墳調査報告』宇多津町教育委員会　1983
『平成５年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会　1994
『平成6年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会　1995
『平成13年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会　2002
『田村遺跡発掘調査報告書』丸亀市教育委員会・株式会社百十四銀行　2002
『新編香川叢書　考古篇』香川県教育委員会編　1983
『新編丸亀市史１　自然・原始・古代・中世編』丸亀市　1995
『香川県の地名』平凡社　1989
森下英治「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997



1．耕作土
2．床土
3．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y6/8）＋黄灰色粘質土（2.5Y/1）客土
4．褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/6）
5．黒褐色粘質土（5YR2/1）
6．黄褐色粘質土（10YR5/8）
7．黄灰色粘質土（2.5YR6/1）地山
8．褐灰色粗砂質土（10YR5/1）＋明褐色細砂混じり粘質土（7.5YR5/8）
9．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y7/6）
10．9に4のブロック混じる
11．黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/8）
12．褐灰色粗砂質土（10YR5/1）
13．明褐色細砂混じり粘質土（7.5YR5/8）＋極黒赤褐色粘質土（5YR2/4）
14．明黄褐色細砂混じり粘質土（10YR6/8）
15．黄色細砂混じり粘質土（2.5Y7/8）
16．明褐色細砂混じり粘質土（2.5YR5/8）
17．褐灰色粗砂質土（10YR5/1）SD01
18．17のFe沈着した層　SD01
19．17に5mm以下の礫少し含む SD01
20．明褐色粗砂質土（7.5YR5/8）SD01
21．黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/8）
22．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）
23．黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/8）＋褐灰色細砂混じり粘質土（10YR5/1）

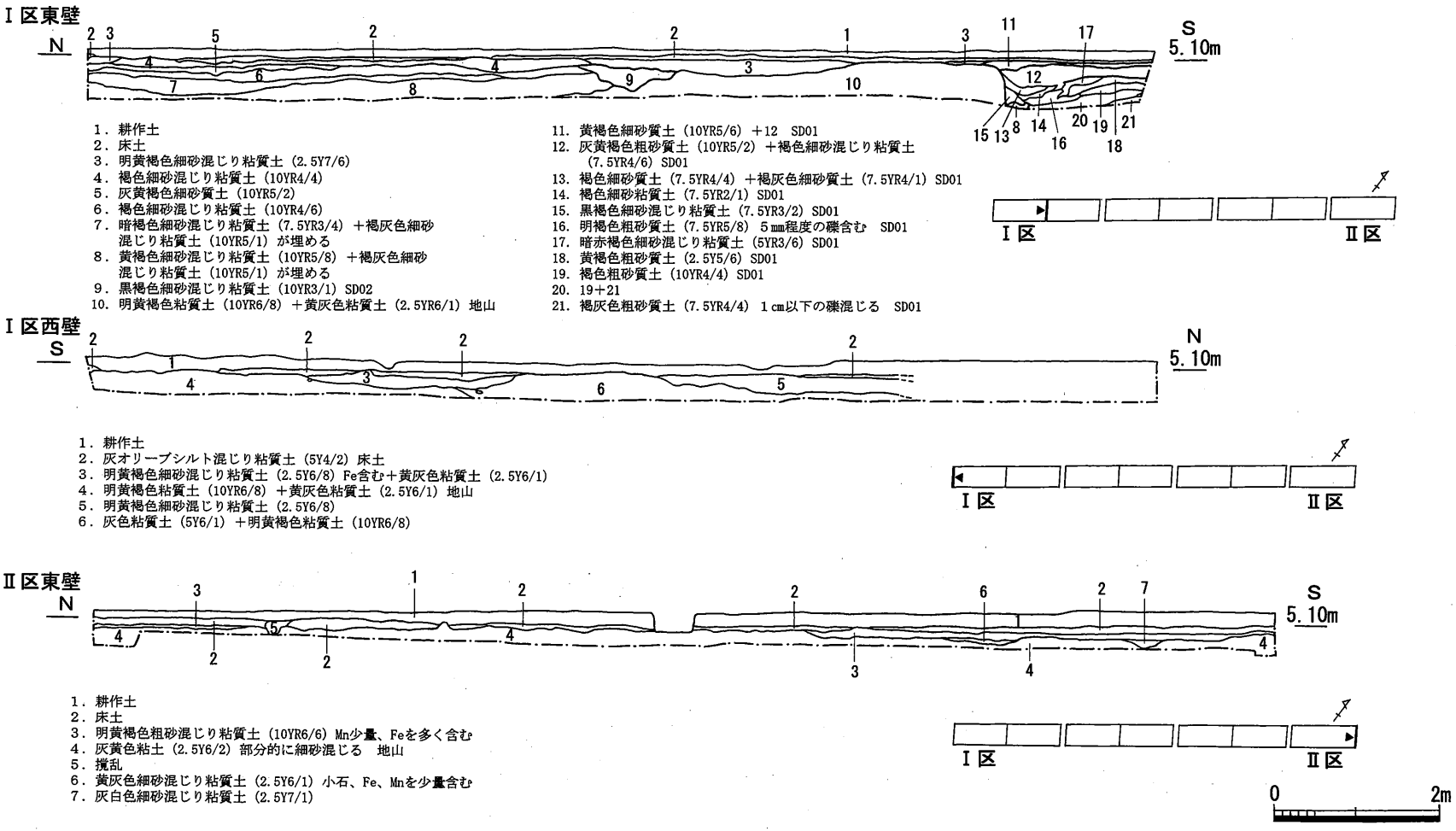
第６図　Ｉ区北壁土層図（1/80）



1．耕作土
2．床土
3．黄褐色細砂質土（10YR5/6）＋4
4．灰黄褐色粗砂質土（10YR5/2）＋褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/6）SD01
5．黄褐色粗砂質土（2.5Y5/6）SD01
6．褐色粗砂質土（10YR4/4）SD01
7．6＋9が混じる　SD01
8．褐色粗砂質土（7.5YR4/6）SD01
9．褐灰色粗砂質土（7.5YR4/1）（1cm以下の礫混じる）SD01
10．明黄褐色粘質土（10YR6/8）＋黄灰色粘質土（2.5Y6/1）地山
11．10に褐色粘質土（10YR4/6）のブロック含む
12．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y7/6）SD03
13．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）SD03
14．13に明黄褐色粘質土（2.5Y7/6）ブロック混じる　SD03
15．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）SD03
16．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）SD03
17．黄褐色砂質土（10YR5/4）SD03
18．褐灰色細砂質土（10YR4/1）SD03
19．褐灰色粗砂質土（10YR4/1）Fe含む　SD03
20．黒褐色細砂混じり粘質土（10YR3/1）SD03
21．15より色調明るい（Fe含む）SD03
22．黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/6）Fe含む　SD03
23．15より色調明るい　SD03
24．黄褐色細砂質土（2.5Y5/3）SD03
25．17より色調少し暗い　SD03
26．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y6/8）
27．26＋床土
28．26に地山ブロック、床土ブロック混じる
29．28より地山ブロックが多く色調明るい

0　2m

第７図　Ｉ区南壁土層図（1/80）

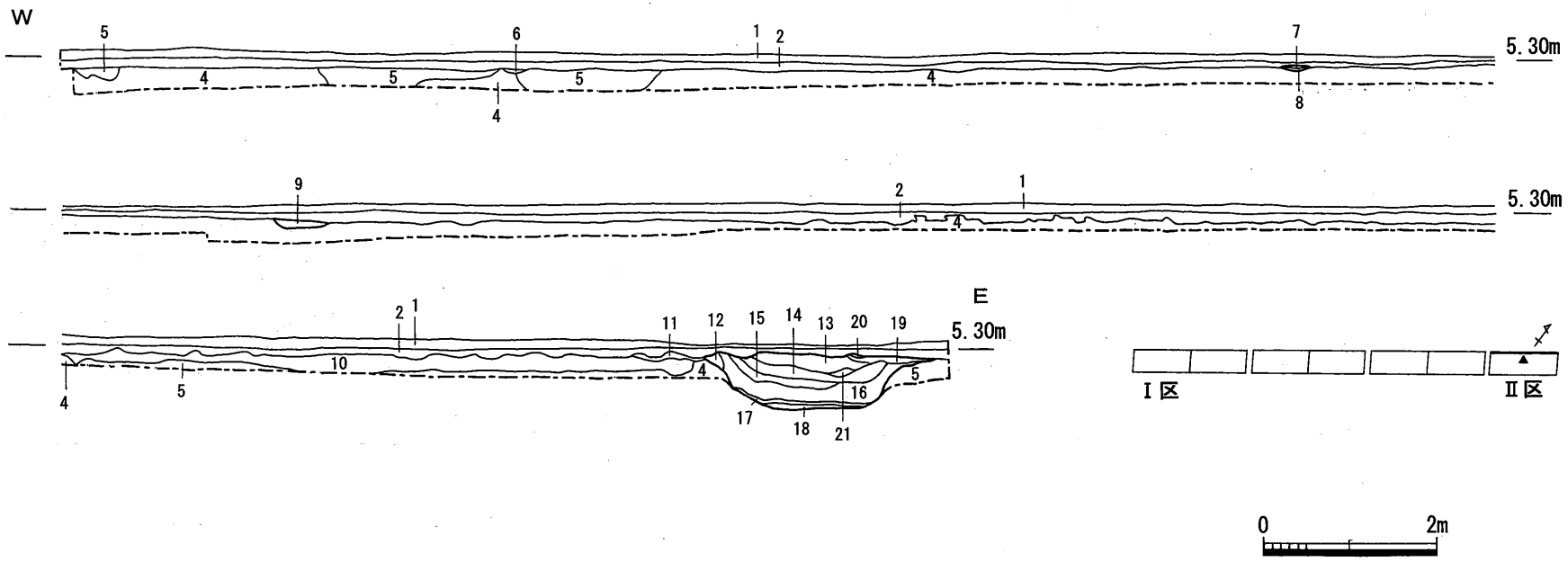


1．耕作土
2．床土
3．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y7/6）
4．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）
5．灰黄褐色細砂質土（10YR5/2）
6．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）
7．暗褐色細砂混じり粘質土（7.5YR3/4）＋褐灰色細砂混じり粘質土（10YR5/1）が埋める
8．黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/8）＋褐灰色細砂混じり粘質土（10YR5/1）が埋める
9．黒褐色細砂混じり粘質土（10YR3/1）SD02
10．明黄褐色粘質土（10YR6/8）＋黄灰色粘質土（2.5YR6/1）地山
11．黄褐色細砂質土（10YR5/6）＋12　SD01
12．灰黄褐色粗砂質土（10YR5/2）＋褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/6）SD01
13．褐色細砂質土（7.5YR4/4）＋褐灰色細砂質土（7.5YR4/1）SD01
14．褐色細砂粘質土（7.5YR2/1）SD01
15．黒褐色細砂混じり粘質土（7.5YR3/2）SD01
16．明褐色粗砂質土（7.5YR5/8）５㎜程度の礫含む　SD01
17．暗赤褐色細砂混じり粘質土（5YR3/6）SD01
18．黄褐色粗砂質土（2.5Y5/6）SD01
19．褐色粗砂質土（10YR4/4）SD01
20．19＋21
21．褐灰色粗砂質土（7.5YR4/4）１cm以下の礫混じる　SD01

1．耕作土
2．灰オリーブシルト混じり粘質土（5Y4/2）床土
3．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y6/8）Fe含む＋黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
4．明黄褐色粘質土（10YR6/8）＋黄灰色粘質土（2.5Y6/1）地山
5．明黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y6/8）
6．灰色粘質土（5Y6/1）＋明黄褐色粘質土（10YR6/8）

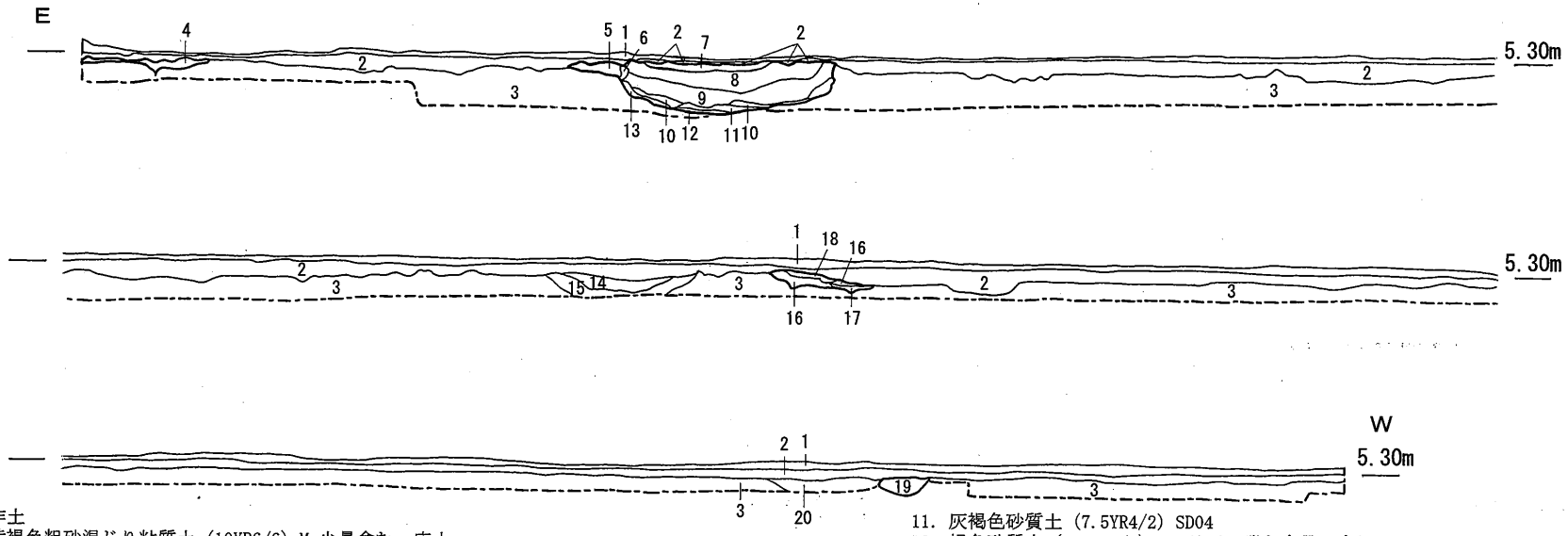
1．耕作土
2．床土
3．明黄褐色粗砂混じり粘質土（10YR6/6）Mn少量、Feを多く含む
4．灰黄色粘土（2.5Y6/2）部分的に細砂混じる　地山
5．攪乱
6．黄灰色細砂混じり粘質土（2.5Y6/1）小石、Fe、Mnを少量含む
7．灰白色細砂混じり粘質土（2.5Y7/1）

第８図　Ⅰ区東壁・西壁、Ⅱ区西壁土層図（1/80）

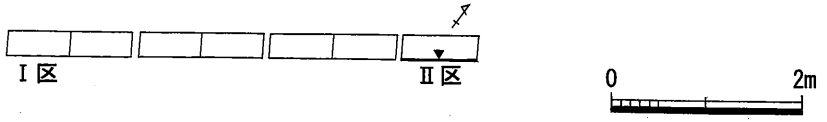


1．耕作土
2．床土
3．明黄褐色細砂混じり粘質土（10YR6/8）
4．淡黄色細砂混じり粘質土（2.5Y8/3）地山
5．暗褐色粘質土（7.5YR3/3）＋褐灰色細砂混じり粘質土（7.5YR5/1）
6．明褐色粘質土（7.5YR5/8）
7．明褐色細砂混じり粘質土（7.5YR5/8）SD08
8．灰黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/2）小石多く含む　SD08
9．灰褐色細砂混じり粘質土（7.5YR7/2）SD06
10．暗赤褐色粘質土（5YR3/2）
11．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR5/3）Fe少し含む
12．灰白色細砂混じり粘質土（2.5Y7/1）Fe多く含む　SD04
13．褐色細砂混じり粘質土（7.5Y4/3）SD04
14．黒褐色細砂混じり粘質土（7.5Y3/2）SD04
15．14極似　SD04
16．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）SD04
17．灰褐色砂質土（7.5YR4/2）SD04
18．褐色砂質土（7.5YR4/3）3cm以下の礫を多量に含む　SD04
19．にぶい黄橙色細砂混じり粘質土（10YR6/3）Fe含む　SD04
20．明黄褐色粗砂混じり粘質土（10YR6/6）Mn少し含む　SD04
21．14より色調明るい　SD04

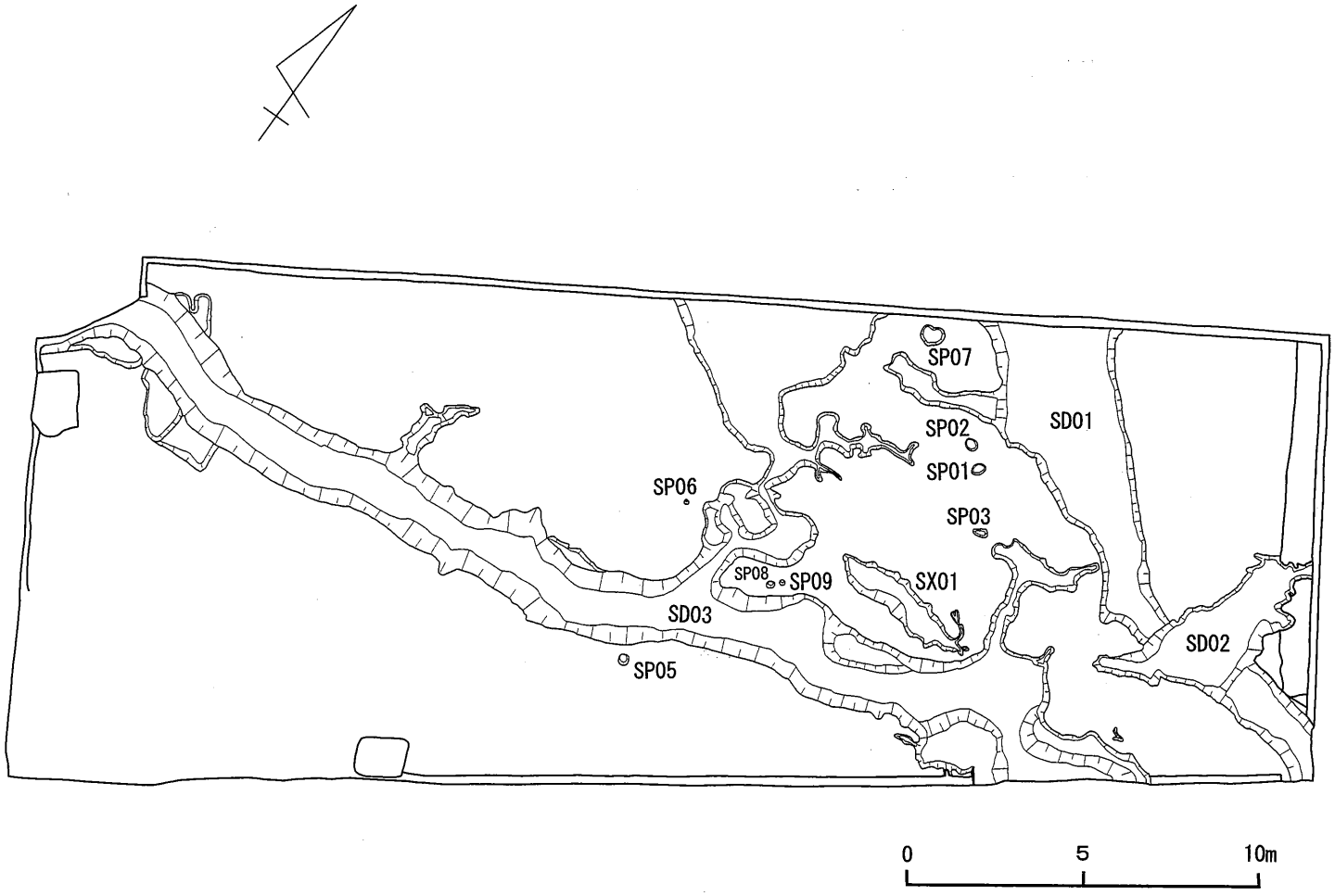
第９図　Ⅱ区北壁土層図（1/80）



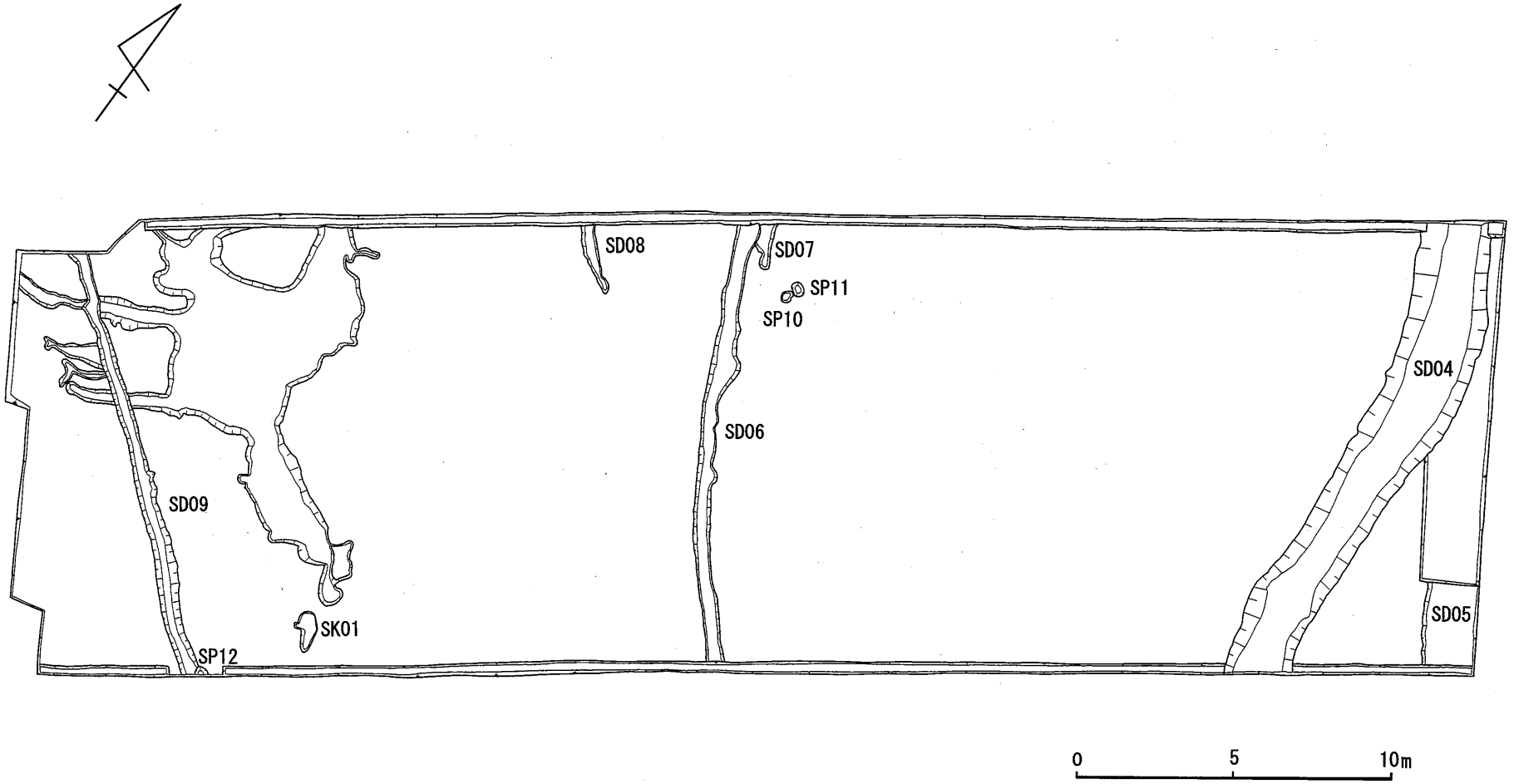
1．耕作土
2．明黄褐色粗砂混じり粘質土（10YR6/6）Mn少量含む　床土
3．灰黄褐色細砂混じり粘質土（2.5Y6/2）地山
4．褐灰色シルト（10YR6/1）3～4cmの礫含む　SD05
5．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR6/3）Fe含む　SD04
6．灰白色細砂混じり粘質土（2.5Y7/1）Fe多く含む　SD04
7．褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/3）SD04
8．黒褐色細砂混じり粘質土（7.5YR3/2）SD04
9．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）SD04
10．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）灰白色細砂混じり粘質土（2.5Y7/1）のブロック混じる　SD04
11．灰褐色砂質土（7.5YR4/2）SD04
12．褐色砂質土（7.5YR4/3）3cm以下の礫を多量に含む　SD04
13．暗褐色細砂混じり粘質土（10YR3/3）SD04
14．黄灰色細砂混じり粘質土（2.5YR5/1）Fe含む、炭化物含む
15．黄灰色粘質土（2.5Y4/1）（粘性強い）
16．にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土（10YR5/3）SD06
17．黒褐色砂質土（10YR2/3）SD06
18．灰黄色細砂混じり粘質土（2.5Y6/2）
19．暗褐色粘質土（10YR3/4）SD09
20．黄色粗砂混じり粘質土（2.5YR6/2）Fe多く含む　撹乱



第10図　Ⅱ区南壁土層図（1/80）



第11図　Ⅰ区遺構平面図（1/200）



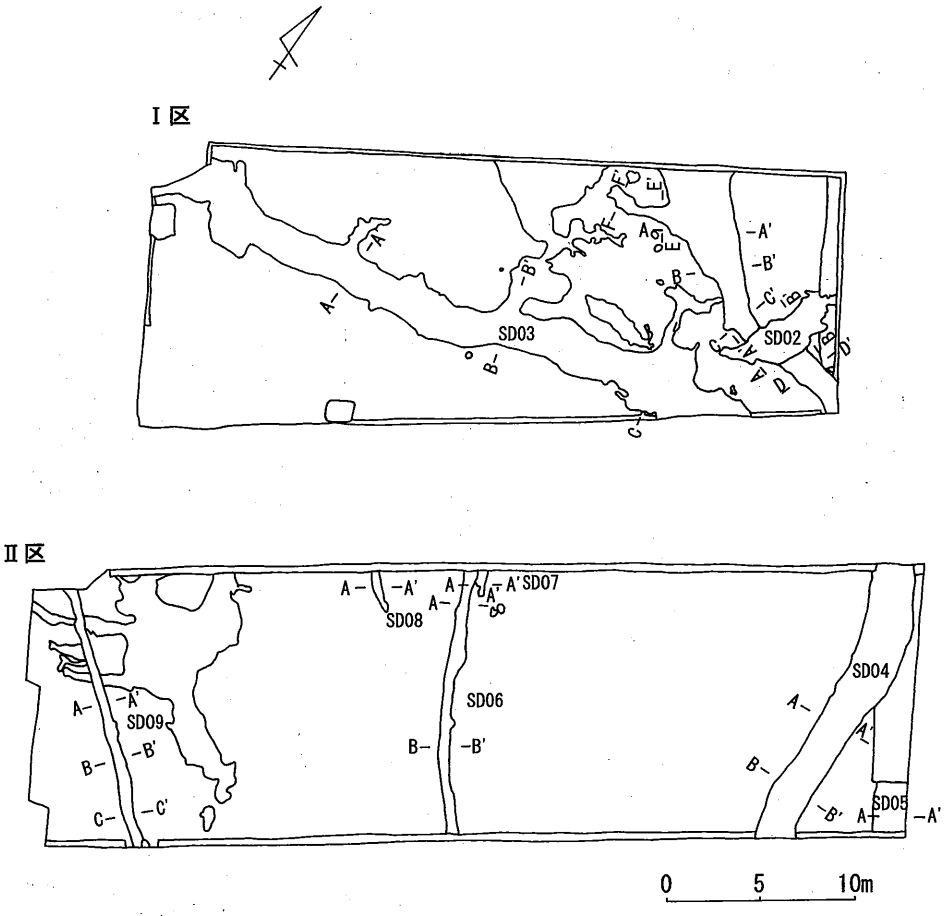
第12図　Ⅱ区遺構平面図（1/200）

第３章　調査の成果

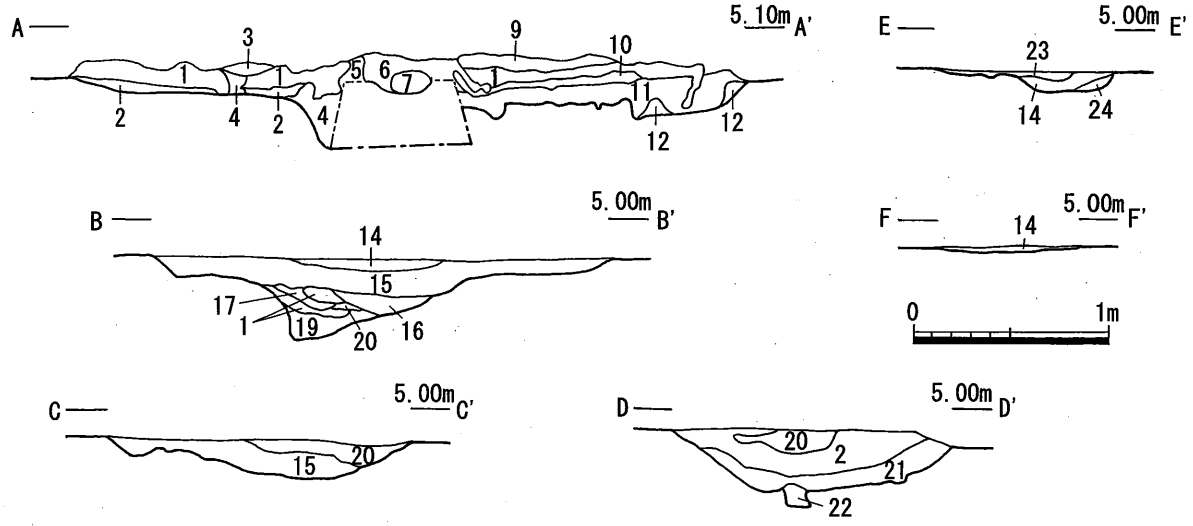
第１節　調査区の概要と土層序

調査区は平坦な水田域で、昭和30年代に圃場整備が実施されている箇所である。調査区は東西に２ヶ所あり西側をⅠ区、東側をⅡ区と命名している。Ⅰ区とⅡ区は220ｍほど離れており、地表面の標高はⅠ区西端部分5.2m、Ⅰ区東端部分5.2m、Ⅰ区とⅡ区の中間地点5.4m、Ⅱ区西端部分5.4m、Ⅱ区東端部分5.4ｍで東側が僅かに高くなっている。しかしこの標高は圃場整備後のものである。圃場整備が施工されていないⅠ区の西側隣接部分の標高は5.0ｍ前後と低くなっており、そこから西に向かって徐々に高くなり、丸亀市道昭和町田村線部分では6.0m前後となる。反対にⅡ区の東側隣接部分の標高は5.3mでそこから東に向かって徐々に高くなり、県立丸亀城西高等学校武道場付近では6.0m前後になる。

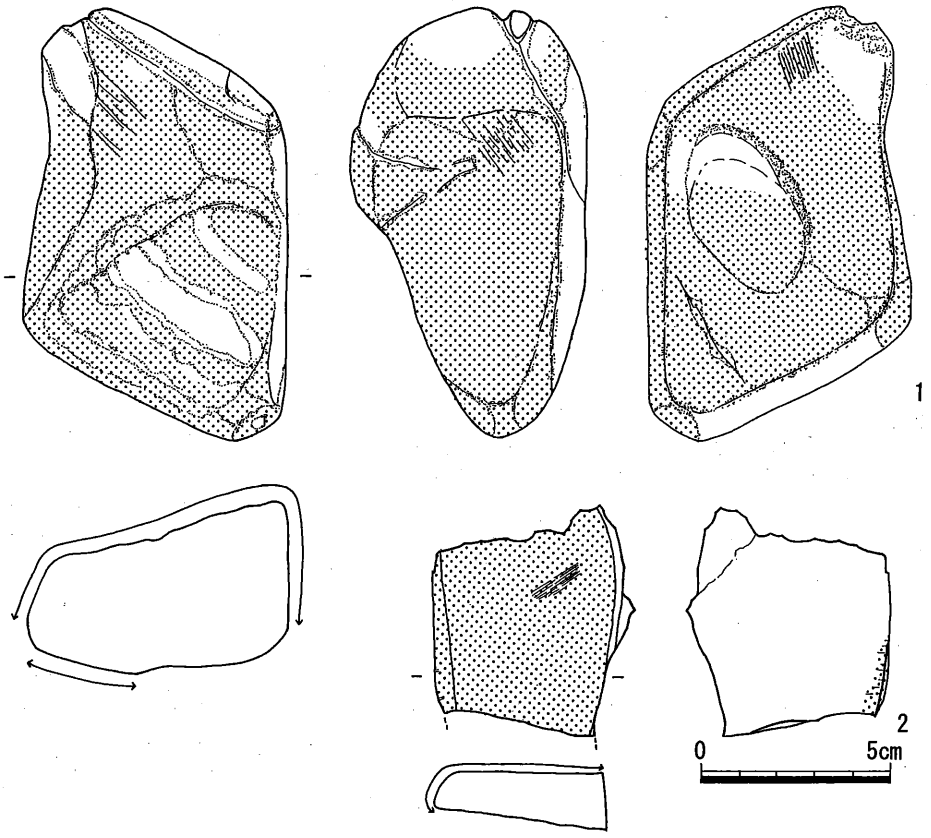
調査区は現代の耕作土と床土の直下で淡黄色～黄褐色系の粘質土の地山面に至る部分が多く、この面で遺構を検出している。しかしこの地山面は圃場整備により上部が削平されている箇所が多く、削平された後に客土を盛っている部分もある。またⅠ区で多く見られるように、地山面の上部には氾濫や低地部分の埋土が堆積している箇所も多い。遺構検出面の標高はⅠ区で5.05m前後、Ⅱ区で5.2m前後である。



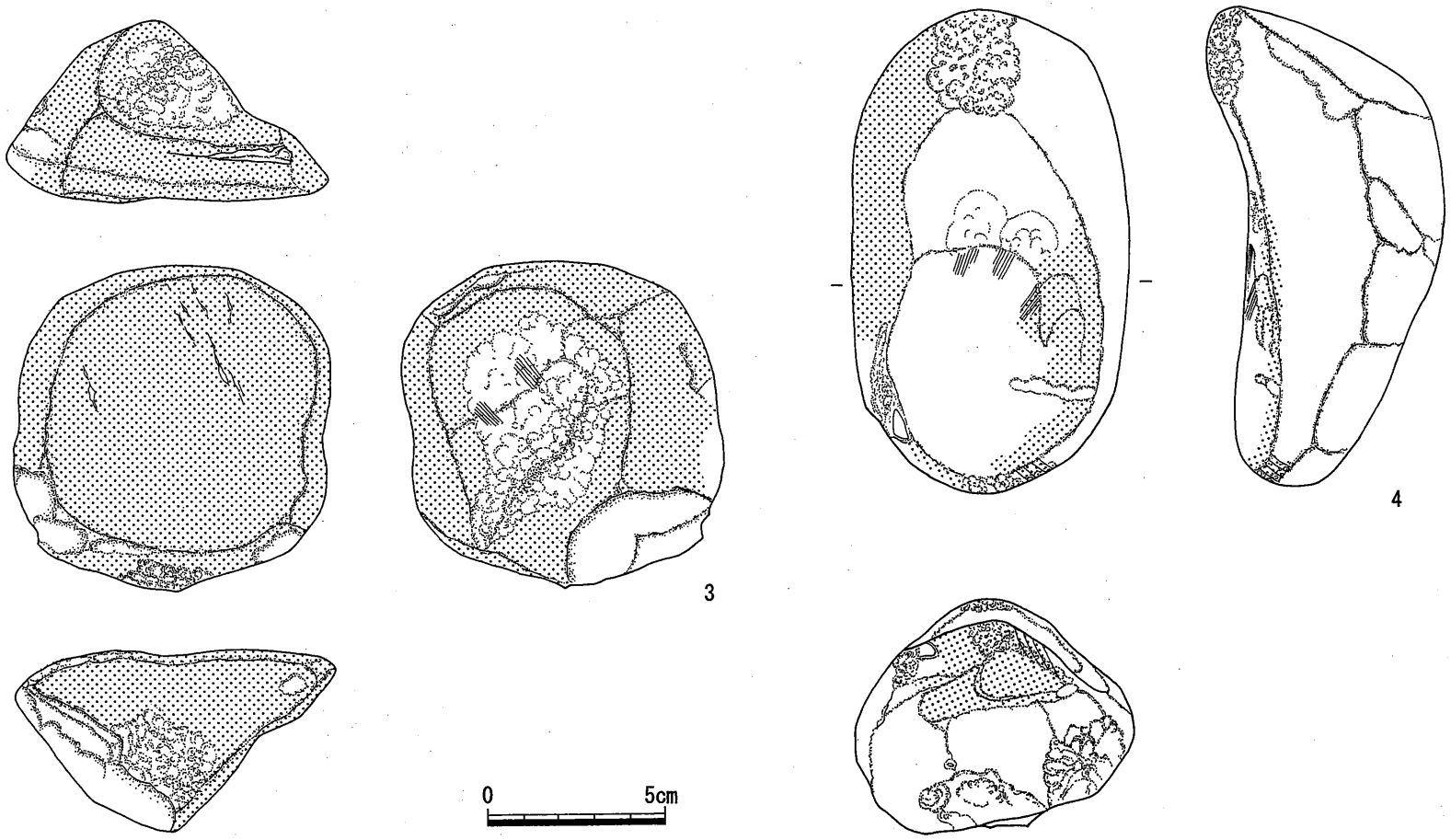
第13図　遺構断面位置図（1/400）



1．灰オリーブ砂質土（粗砂）（5Y6/2）
2．黄灰色粘質土（粗砂・１よりも粗い）（2.5YR6/1）
3．灰色粘質土（粗砂）（5Y6/1）
4．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）
5．褐灰色細砂混じり粘質土（10YR6/1）
6．明黄褐色細砂混じり粘質土（10YR6/8）
7．黒褐色粘質土（10YR2/2）
8．明黄褐色砂質土（粗砂～細砂）（2.5Y6/8）
9．灰オリーブ砂質土（粗砂に2～5mm程度の礫含む）
10．灰白色砂質土（1よりも粗い粗砂）（2.5Y7/1）
11．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）
12．土層注記なし
13．暗褐色粘質土（10YR3/4）
14．黄褐色細砂質土（10YR5/8）
15．黄褐色砂質土（10YR5/8）（14の砂混じる）
16．褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/6）炭片含む
17．明褐色粗砂混じり粘質土（7.5YR5/8）
18．１＋17
19．黄褐色粗砂質土（10YR5/8）2mmの粗砂含む
20．灰オリーブ砂（5Y6/2）
21．褐灰色粘質土（10YR4/1）
22．灰色細砂質土（5Y4/1）
23．褐灰色粗砂質土（10YR5/1）＋黄褐色粗砂質土（10YR5/8）
24．灰色細砂質土（5Y4/1）



第14図　ＳＤ01断面図（1/40）、出土遺物（１）（1/2）



第15図　ＳＤ01出土遺物（２）(1/2)

なお、発掘調査時に測量基準点を打設する際に、道路設計・工事用の仮基準点の仮座標を使用して測量基準点の座標を求めてしまい、その座標値を使用して対空標識の座標値を求め航空測量を実施していたことが整理作業時に判明した。従って航空測量図面に記載された座標値は国土座標第Ⅳ系に全く合致しないものであるため、遺構平面図には国土座標を記入することが出来なかった。国土地理院の国土基本図から復元した調査地の位置は概略的ではあるが国土座標第Ⅳ系で、Ⅰ区：X＝141040～141075、Y＝26605～26640、Ⅱ区：X＝141190～141230、Y＝26815～26860の部分である（第２図）。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

溝状遺構

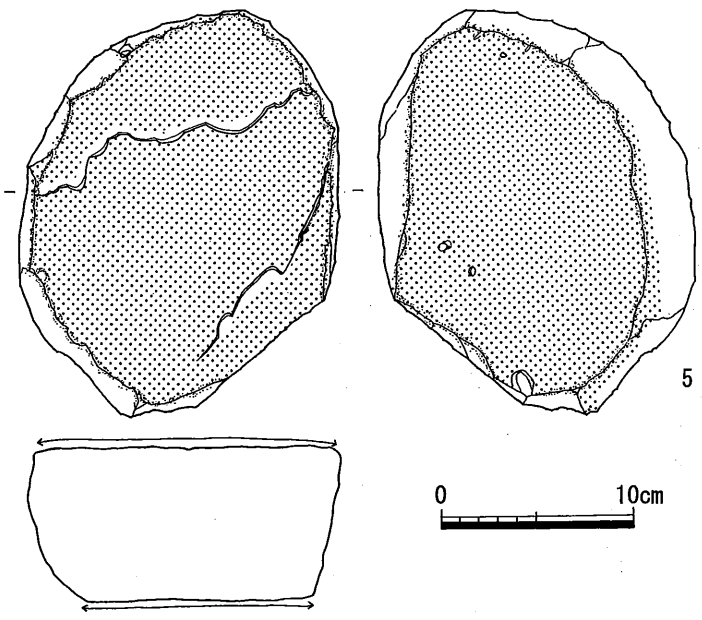
ＳＤ01（概報遺構名：Ⅰ区ＳＤ06）（第14図～第16図）

Ⅰ区の東側の調査区北壁部分から南東隅にかけて検出した溝状遺構である。中央部分で僅かに屈曲しており、屈曲部分付近を後述するＳＤ02に壊されている。検出した部分で全長15.0m、幅は1.1～3.9mで屈曲部分付近の幅が狭く、調査区北壁付近で広くなっている。掘り込みは比較的緩やかで、底部は北半部で一段低くなっている箇所がある。深さは最深部で0.43m、埋土は黄灰色～黄褐色の砂質土が主体となっているが、断面Ａ－Ａ´部分では砂質土と粘質土が細かく入り混じっている。また南半部では底部付近に粘質土が堆積している。

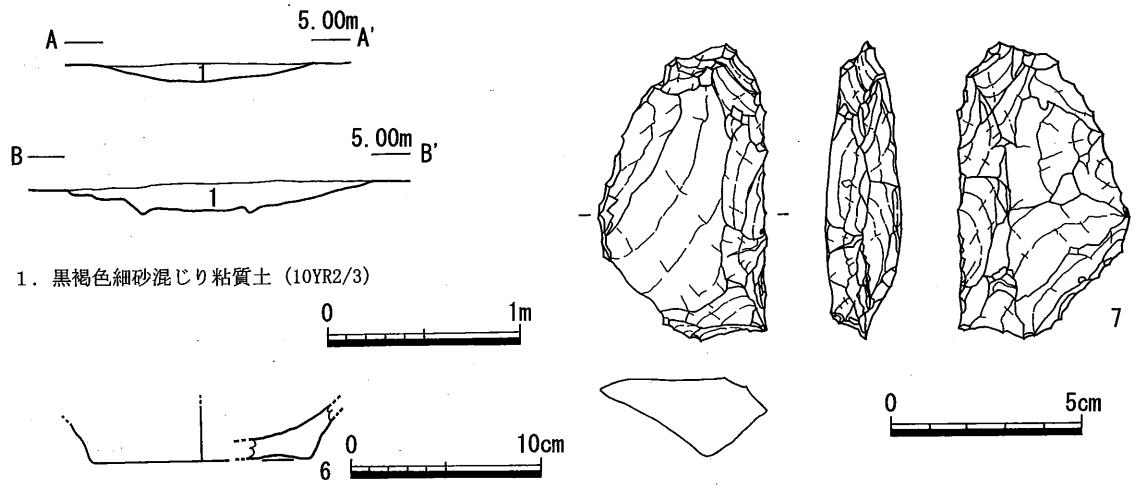
調査区北壁付近では北西方向に枝分かれした部分がある。この部分は全長3.5m、幅0.45～1.1m、深さは最深部でも0.1mと浅くなっている。埋土は黄褐色細砂質土が主体となっている。

遺物の出土量は少ない。１～５は砥石で１・３・４は砂岩を、２・５は安山岩を使用している。１は４面とも使用している。３は砥石であるが、２箇所に敲打痕が認められ、敲石を砥石に転用している。４は両端部に敲打痕が認められる。また下端部は磨滅の度合いが強く、磨石としての使用も考えられる。側縁部も磨滅しているが、これは磨石として使用した時の手擦れの痕跡とも考えられる。すると本来は砥石として使用していなかった可能性も考えられる。５は上下２面を使用している。この他に弥生土器と考えられる細片が２点出土している。

ＳＤ01は後述のＳＤ02より古い時期のものであることから、出土遺物からは明瞭なことは言えないが、ＳＤ02と同様に弥生時代前期に遡る可能性を指摘するに止めておく。



第16図　ＳＤ01出土遺物（３）（1/4）



第17図　ＳＤ02断面図（1/40），出土遺物（1/4，1/2）

ＳＤ02（概報遺構名：Ｉ区ＳＤ05）（第17図）

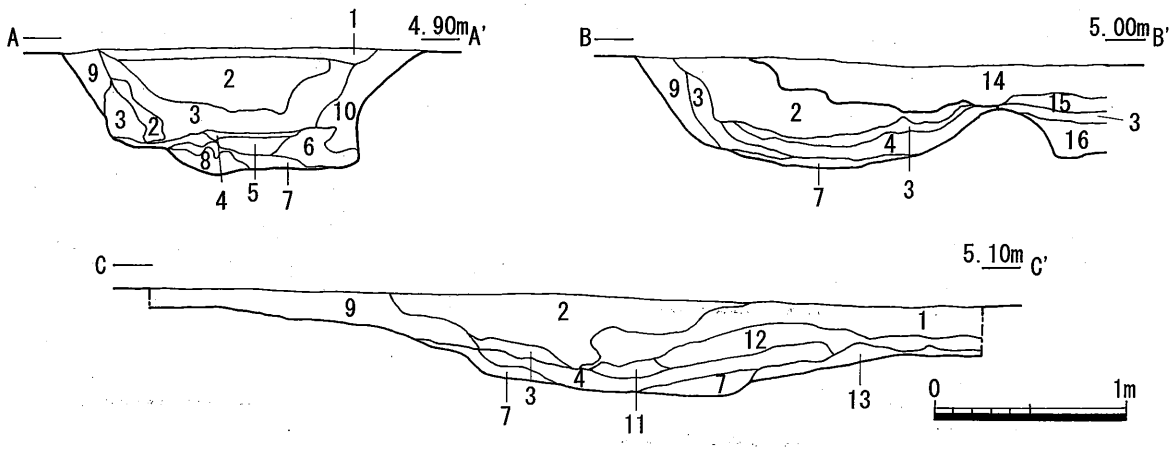
Ｉ区の東壁部分から南西方向にかけて検出した溝状遺構である。検出部分で全長6.8m、幅0.3～2.1m、深さ0.22mである。中央部分は幅広で、東壁際で極端に狭くなりそのまま調査区外に至る。東壁際では両岸とも不整形に湾曲している。掘り込みは緩やかで断面は浅い皿状になっている。底部は南西から東に向かって僅かに下っている。埋土は黒褐色細砂混じり粘質土の単一層である。

遺物の出土量は少ない。６は壷の底部であるが全体に磨滅している。砂粒を多く含む粗い胎土である。７はサヌカイト製の石核である。打面を交互に変えながら剥片を剥離している。この他に弥生土器の細片が出土しており、いずれも比較的砂粒を多く含む胎土で、弥生時代前期の土器の胎土に類似している。６や土器の胎土などから積極的ではないが、ＳＤ02は弥生時代前期まで遡る可能性を指摘するに止めておく。

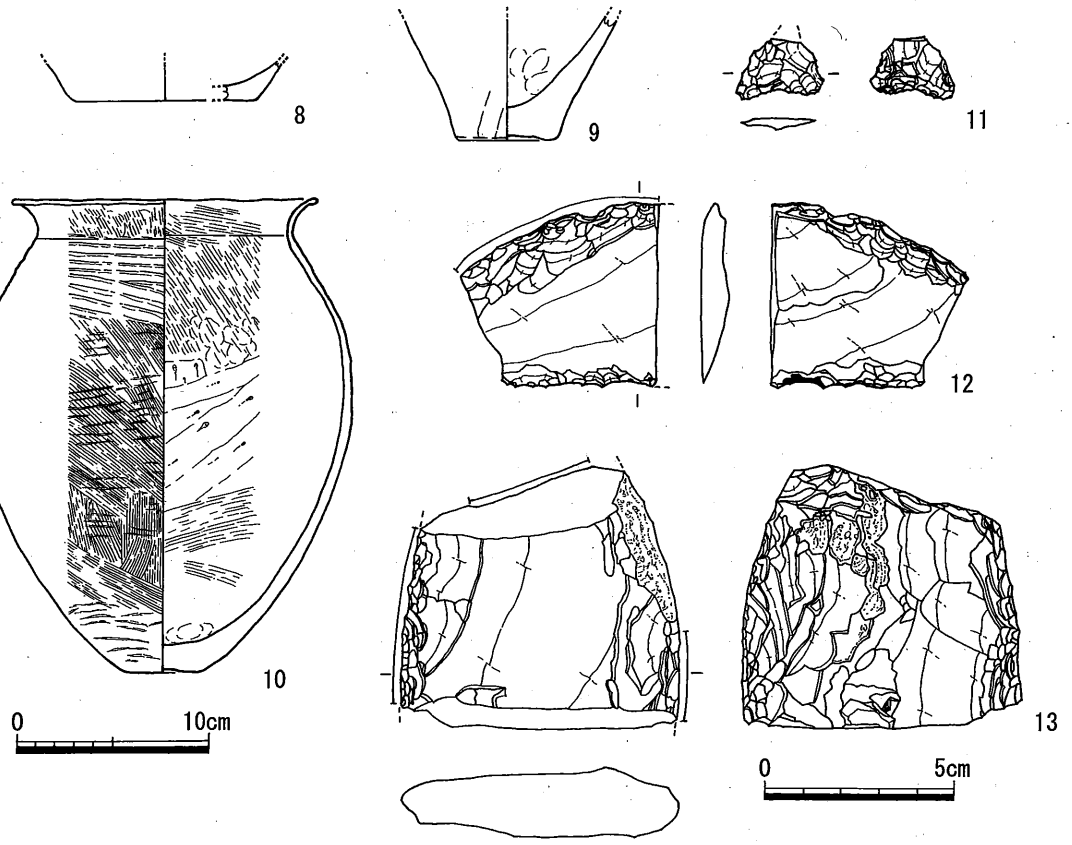
ＳＤ03（概報遺構名：Ｉ区ＳＤ04）（第18図）

Ｉ区の北西隅から南東部の南壁にかけて、調査区を斜めに横断するように検出した溝状遺構である。検出部分で全長30.0m、幅1.7～5.1m、深さ0.66mである。僅かに蛇行するものの全体的にはほぼ直線状になっており、南壁際で幅広になる以外は全体にほぼ幅２m前後を保っている。北側には不整形な自然の流路跡が３箇所ほどＳＤ03に注ぎ込んでいる。ＳＤ03の掘り込みは比較的緩やかであるが、侵食のためか下部が急になる部分や、テラス状に段になる部分もある。断面はU字形になる部分が多く、底部は南東から北西に向かって緩やかに下っている。埋土の土層図からＳＤ03は再掘削されており、維持・管理に努めている。最終的には地山ブロックを多く伴った土（２層）で一気に埋めて廃絶している。断面Ｂ－Ｂ´部分では廃絶後に自然流路が流れ込み、断面Ｃ－Ｃ´部分ではＳＤ03が機能しているときに自然流路が注ぎ込んでいる。埋土は底部付近に砂質土が堆積している。

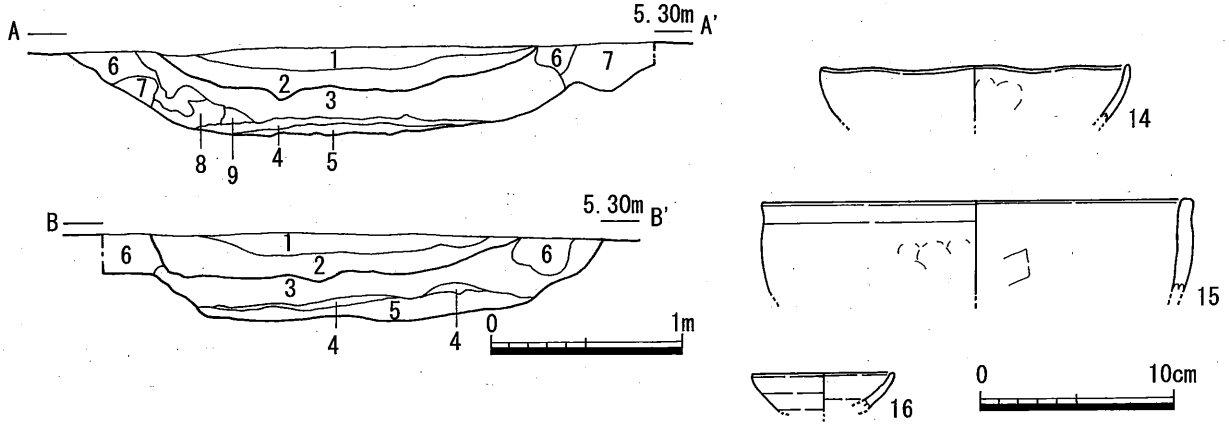
遺物の出土量は少ない。８は壷の底部、９は甕の底部である。10は最下層で出土した甕である。口縁部は外反し端部を丸く収め、内・外面にハケ目を施している。体部は最大径が上半部にあり、外面はタタキの後にハケ目を施すが、上部と下部にはタタキの痕跡が明瞭に残る。内面は上部にハケ目、中央付近にヘラケズリを施している。底部は肥厚し若干の上げ底になっている。11はサヌカイト製の凹基の石鏃であるが、先端部は欠損している。12はサヌカイト製の打製石包丁である。背部には敲打を施し、刃



1．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）
2．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）、明黄褐色粘質土（2.5Y7/6）（地山）のブロック多く混じる
3．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）
4．にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
5．黄褐色砂質土（10YR5/6）
6．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）３より明るい
7．明黄褐色砂質土（10YR6/8）５より明るい
8．黒褐色粘土（10YR3/2）
9．浅黄色細砂混じり粘質土（2.5Y7/3）
10．１より明るい
11．４よりやや暗い
12．灰黄褐色細砂質土（10YR5/2）
13．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）に地山ブロック混入
14．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）
15．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/4）、明黄褐色粘質土（2.5Y7/6）（地山）のブロック多く混じる
16．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）



第18図　ＳＤ03断面図（1/40）、出土遺物（1/4、1/2）



1．褐色細砂混じり粘質土（7.5YR4/3）
2．黒褐色細砂混じり粘質土（7.5YR3/2）
3．褐色細砂混じり粘質土（10YR4/6）
4．灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
5．褐色砂質土（7.5YR4/3）3cm以下の礫多量に含む
6．灰白色細砂混じり粘質土（2.5Y7/1）Fe多く含む
7．にぶい黄橙色細砂混じり粘質土（10YR6/3）Fe含む
8．にぶい黄褐色細砂混じり粘質土（10YR4/3）6のブロック混じる
9．暗褐色細砂混じり粘質土（10YR3/3）

第19図　ＳＤ04断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

部は両面から加工している。13はサヌカイト製の石鏃である。基部は折れた後に敲打を施している。両側縁部にも敲打を施している。

この他に細片が出土しているが、上層出土遺物を含めてすべて弥生土器である。最下層出土の10からＳＤ03は弥生時代後期に掘削され、後期のうちに埋め戻され廃絶したものと考えられる。

ＳＤ04（概報遺構名：Ⅱ区ＳＤ01）（第19図）

Ⅱ区の東部で南北方向に検出した溝状遺構である。調査区の北東隅から南に向かって５ｍほどで僅かに湾曲してそのまま南壁に至る。検出部分で全長16.1m、幅1.9～2.6m、深さ0.46mである。掘り込みは緩やかで、底部は南から北に向かって緩やかに下っている。埋土の土層図からＳＤ04は再掘削されているが、その規模は当初の半分程度に止まっている。埋土は下層に褐色系の砂質土が主に堆積しており、再掘削した後の上層の部分の埋土は褐色と黒褐色の細砂混じり粘質土が堆積している。

遺物の出土量は少ない。14は鉢で、口縁部の作りは雑である。ナデているが大部分は摩滅している。15も鉢で、直立に近い口縁部からそのまま体部に至る。口縁部外面は強くナデている。16は土師器の小皿で、回転ナデで整形しているが、特に口縁部内面を強くナデている。

16は埋土の最上層から出土しており、最上層からは他に近世の磁器の細片が１点出土している。この他の遺物は最上層～最下層まで含めてすべて弥生土器であり、中には二重口縁の壷の細片も含まれている。ＳＤ04に近接して後述する中世後半～近世のＳＤ05があることからも、16は混入したものと考えたほうが自然であり、従ってＳＤ04は弥生時代後期の所産と考えられる。

小穴

ＳＰ01～09

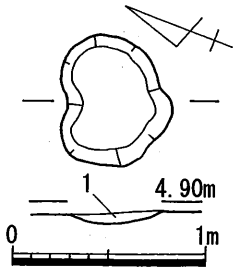
すべてＩ区で検出した小穴で、建物や柵の柱穴となるものはない。平面形は円形～楕円形のものが多く、ＳＰ05以外はいずれも深さは0.1m未満と浅くなっている。埋土は褐色系の砂混じり粘質土が中心になっている。遺物はＳＰ05から弥生時代後期と考えられる土器細片が１点出土しただけである。詳細は第１表のとおりである。

遺構名	平面形	規模（m）	深さ（m）	埋土	調査時遺構名
ＳＰ01	楕円形	長径0.42×短径0.31	0.06	褐色砂質土(10YR2/3)	Ｉ区ＳＰ02
ＳＰ02	楕円形	長径0.38×短径0.32	0.05	褐色砂質土(10YR6/1)	Ｉ区ＳＰ03
ＳＰ03	不整方形	長辺0.42×短辺0.12～0.21	0.08	暗褐色粗砂混じり粘質土(10YR3/3)	Ｉ区ＳＰ04
ＳＰ04	不整形	長辺0.43×短辺0.11～0.21	0.08	褐色細砂混じり粘質土(10YR4/4)	Ｉ区ＳＰ05
ＳＰ05	方形	一辺0.30	0.12	灰黄色砂混じり粘質土(2.5Y6/2)	Ｉ区ＳＰ06
ＳＰ06	円形	直径0.12	0.05	暗褐色粗砂混じり粘質土(10YR3/3)	Ｉ区ＳＰ07
ＳＰ07	不整楕円形	長径0.69×短径0.48～0.56	0.05	灰褐色粗砂混じり粘質土(7.5YR4/2)	Ｉ区ＳＰ14
ＳＰ08	円形	直径0.20	0.06	暗褐色粗砂混じり粘質土(10YR3/3)	Ｉ区ＳＰ15
ＳＰ09	円形	直径0.14	0.07	暗褐色粗砂混じり粘質土(10YR3/3)	Ｉ区ＳＰ16

第１表　弥生時代小穴一覧

ＳＰ07（調査時遺構名：Ｉ区ＳＰ14）（第20図）

Ｉ区の北壁付近のＳＤ01の西側で検出した小穴である。平面形は不整楕円形で、長径0.69m、短径0.48～0.56m、深さ0.05mである。掘り込みは緩やかで、埋土は灰褐色粗砂混じり粘質土の単一層である。他の小穴より規模が大きく、土坑としたほうが良いかもしれない。遺物は出土していない。



1．灰褐色粗砂混じり粘質土（7.5YR4/2）

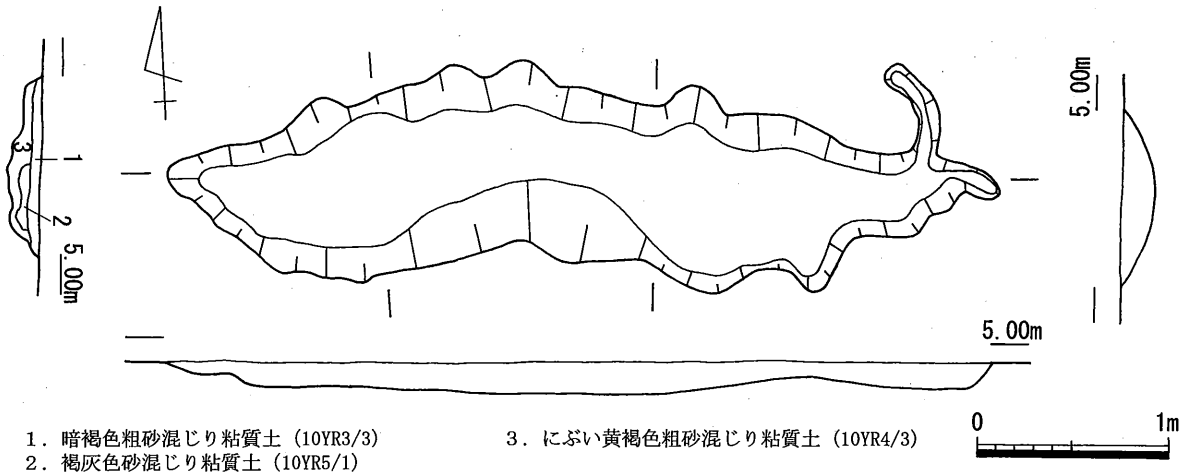
第20図　ＳＰ07平・断面図　(1/40)

不明遺構

ＳＸ01（調査時遺構名：Ｉ区ＳＸ01）（第21図）

Ｉ区の中央やや東寄りでＳＤ03の北側に隣接して検出した遺構である。平面形は不整形で東西に細長く、東端部は枝分かれしている。東西の長さ4.41m、南北の幅1.06m、深さ0.18mである。掘り込みは緩やかで、底部の東側では盛り上がっている。埋土は上層に暗褐色粗砂混じり粘質土が、下層にはにぶい黄褐色粗砂混じり粘質土が堆積している。

遺物は風化したサヌカイト製の剥片が１点出土しているのみで、土器は出土していない。



1．暗褐色粗砂混じり粘質土（10YR3/3）
2．褐灰色砂混じり粘質土（10YR5/1）
3．にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土（10YR4/3）

第21図　ＳＸ01平・断面図（1/40）

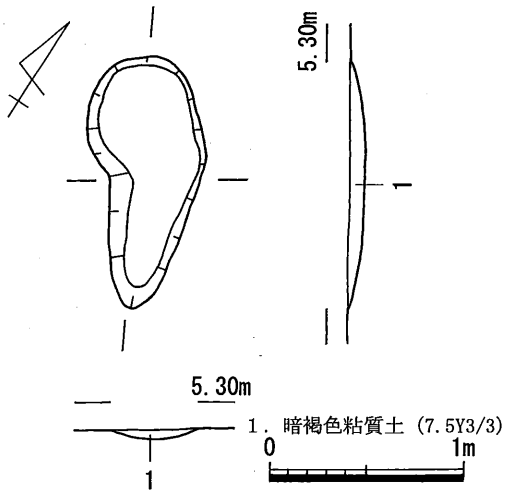
第３節　中世後半～近世の遺構と遺物

土坑

ＳＫ01（調査時遺構名：Ⅱ区ＳＫ02）（第22図）

Ⅱ区の南西部の南壁付近で検出した土坑である。平面形は中央部分が内側に湾曲した楕円形で、長径1.32m、短径0.60mである。深さは0.08mと浅く、底部はほぼ平坦になっている。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

遺物は出土していないが、埋土の色調や土質、周辺の遺構内容などを考えると近世の所産である可能性が高い。



第22図　ＳＫ01平・断面図（1/40）

溝状遺構

ＳＤ05（概報遺構名：Ⅱ区ＳＤ02）（第23図）

Ⅱ区の南東隅で検出した溝状遺構である。東側部分は調査区外で検出しておらず、北側は撹乱のため削平されている。検出部分は直線的で全長2.7m、幅1.6m、深さ0.07m、主軸方向はＮ－31°－Ｗである。埋土は褐灰色砂混じり粘質土の単一層である。記録図面によると土層断面実測部分の幅と遺構平面図の幅が不整合である。

17は土師質の捏鉢で、口縁部は肥厚している。18・19は土師質の土鍋で、口縁部外面には板ナデを施している。20は砂岩製の砥石で両面を使用しているが、裏面の使用部分は限られている。この他に細片であるが近世の陶器擂鉢、磁器、平瓦が出土しており、ＳＤ05は中世後半から近世にかけての所産と考えられる。

ＳＤ06（調査時遺構名：Ⅱ区ＳＤ09）（第23図）

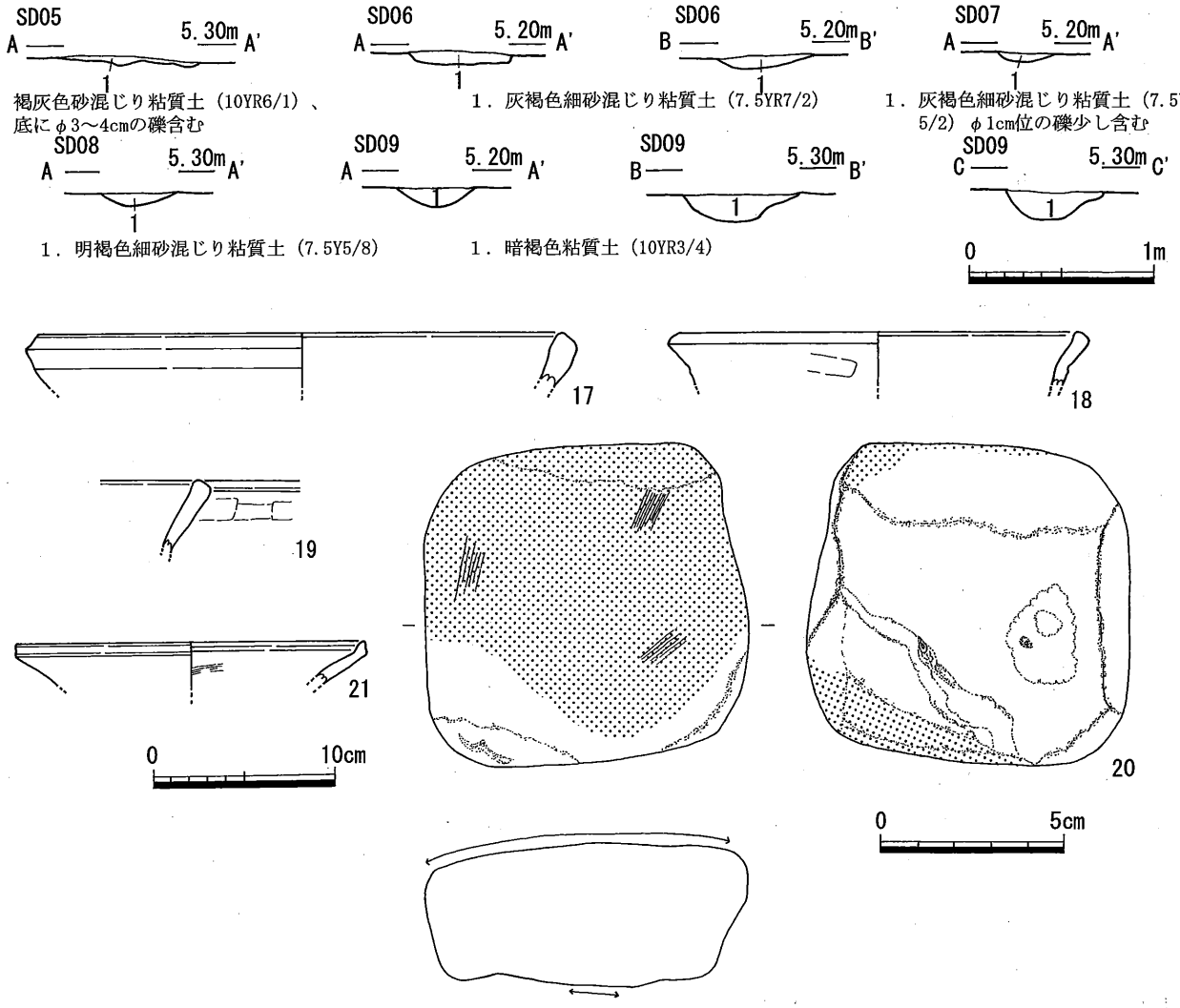
Ⅱ区の中央部分で北西－南東方向に検出した溝状遺構で、全体に僅かに湾曲しながら調査区を縦断している。西側の掘り込み部分は整然としているが、東側は部分的に突出している部分がある。検出部分で全長13.9m、幅0.4～0.95m、深さ0.08m、主軸方向はＮ－28°－Ｗである。底部は中央部分がやや高いが、その他はほぼ一定になっている。埋土は灰褐色細砂混じり粘質土の単一層である。

21は弥生土器の壷で、口縁部端部を上方に拡張している。内・外面ともにナデているが、内面にはハケ目を施している。この他に細片であるが近世の陶磁器が出土しており、埋土の土質や色調などを合わせて考えるとＳＤ06は近世の可能性が高く、弥生土器は混入したものと考えられる。

ＳＤ07（調査時遺構名：Ⅱ区ＳＤ10）（第23図）

Ⅱ区中央部の北壁部分で検出した溝状遺構である。北壁から南東方向に向かい、急激に幅を狭めて収束している。検出した部分で全長1.4m、幅0.6m、深さ0.05m、主軸方向はＮ－28°－Ｗで、西側をＳＤ06に壊されている。埋土は灰褐色細砂混じり粘質土の単一層である。

遺物は出土していないが、埋土の土質・色調及び先述のＳＤ06に壊されていることから、ＳＤ06より古い時期の近世と考えられる。



第23図　ＳＤ05・06・07・08・09断面図（1/40）、ＳＤ05・06出土遺物（1/4、1/2）

ＳＤ08（調査時遺構名：Ⅱ区ＳＤ11）（第23図）

Ⅱ区中央部やや西寄りの北壁部分で検出した溝状遺構で、ＳＤ06の西4.5mのところに位置している。僅かに湾曲して南東方向に向かい収束している。検出部分で全長2.3m、幅0.5m、深さ0.08m、主軸方向はＮ－45°－Ｗである。埋土は明褐色細砂混じり粘質土の単一層である。

遺物は出土していないが、埋土の土質・色調などから近世のものと考えられえる。

ＳＤ09（概報遺構名：Ⅱ区ＳＤ14）（第23図）

Ⅱ区の西端部付近で北西－南東方向に検出した溝状遺構である。全体に直線的で、調査区を縦断している。検出部分で全長13.9m、幅0.7m、深さ0.15m、主軸方向はＮ－51°－Ｗで、南半部のほうが幅が広くなっている。掘り込みは南に向かうほど緩やかになっており、底部は全体にほぼ同じ高さである。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。南壁部分では後述するＳＰ12に部分的に壊されている。

遺物は出土していないが、ＳＤ09は東側にある近世の遺物を含む風倒木痕や流水痕が埋没した後に掘削されていることと、埋土の土質・色調などから近世のものと考えられえる。

遺構名	平面形	規模（m）	深さ（m）	埋土	調査時遺構名
ＳＰ10	不整方形	長辺0.35×短辺0.30～0.35	0.11	黒褐色粘質土(10YR2/3)	Ⅱ区ＳＰ01
ＳＰ11	隅丸方形	長辺0.47×短辺0.35	0.08	にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)	Ⅱ区ＳＰ08
ＳＰ12	円形？	直径0.42（検出部分）	0.16	灰黄色粗砂混じり粘質土(2.5Y6/2)	Ⅱ区ＳＰ09

第２表　近世小穴一覧

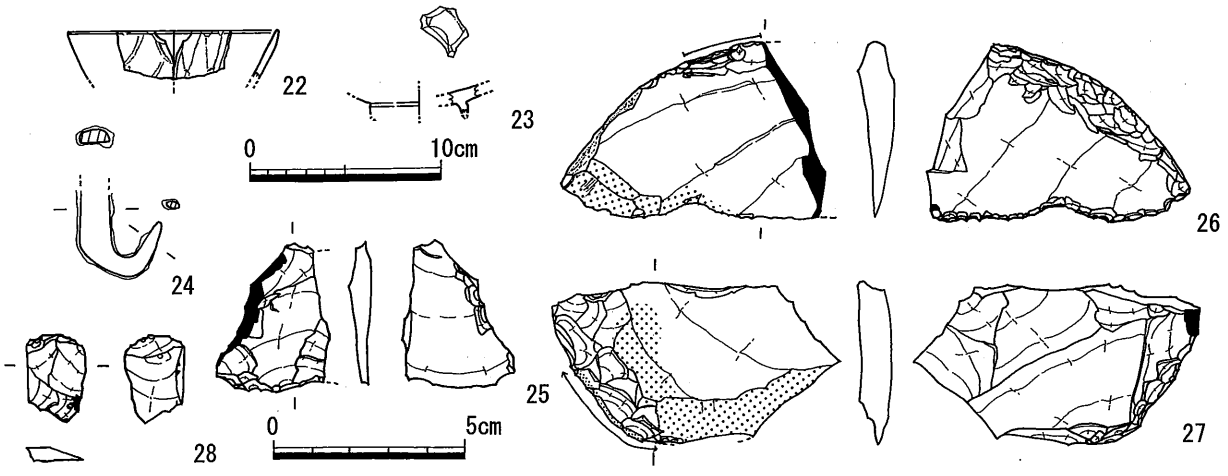
小穴

ＳＰ10～12

すべてⅡ区で検出した小穴で、建物や柵の柱穴となるものはなく、遺物も出土していない。ＳＰ10の埋土は有機物を含むためか黒褐色粘質土になっているが、土質を見る限り近世以降と考えられる。ＳＰ12の南半部は調査区外のため全体を検出していない。詳細は第２表のとおりである。

第４節　包含層出土の遺物（第24図）

28がⅠ区から出土した以外はすべてⅡ区出土の遺物である。22・23はいずれも肥前系の磁器の碗である。24は先端が湾曲し端部が鋭利になっている鉄製品である。釣針状の形態であるが、断面形は扁平である。25はサヌカイト製の剥片であるが、下部に加工痕がある。26はサヌカイト製の打製石包丁で、先端部付近に磨製の刃部が認められる。この磨製の刃部が欠損した後に、欠損部分に片面から細かい加工を施して刃部を再生している。磨製の刃部周辺から再生した刃部にかけて磨滅している。背部には敲打を施している。27はサヌカイト製のスクレイパーである。側縁部の矢印の部分が使用のため磨滅している。この刃部の横の部分一帯が磨滅しているが、これは手に持って使用した際の手擦れによるものと考えられる。実際に手に持つと、右手の親指の先端部と付け根部分が当る部分が磨滅している。28はサヌカイト製の剥片である。



第24図　包含層出土遺物（1/4、1/2）

第４章　自然科学分析

今津中原遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（Ｓｉ０２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

今津中原遺跡の発掘調査では、弥生時代後期とみられる溝状遺構が検出され、当時の灌漑用水路の可能性が考えられた。そこで、溝内堆積土を対象としてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討することになった。

２．試料

調査対象は、Ｉ区SD04とⅡ区SD01の２箇所である。分析試料は、Ｉ区SD04では上位より14層（褐色細砂混じり粘質土＋明黄褐色粘質土ブロック）、17層（黄褐色砂質土）、18層（褐灰色細砂質土）、19層（褐灰色粗砂質土）、20層（黒褐色細砂混じり粘質土）の５点、Ⅱ区SD01では上位より26層（にぶい黄橙色細砂混じり粘質土）、20層（褐色細砂混じり粘質土）の上下、21層（黒褐色細砂混じり粘質土）の上下、22層（黒褐色細砂混じり粘質土）、23層（褐色細砂混じり粘質土）の８点の計13点である。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。

4．分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第３表、第25図・第26図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

（１）Ⅰ区SD04

イネは14層、18層、20層で検出されている。18層では高い密度である。ヨシ属は17層を除く各層で検出されている。18層では高い密度である。ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型はすべての試料から検出されている。このうち、ススキ属型は17層と19層で、ネザサ節型は14層、17層、18層および19層で高い密度である。チマキザサ節型は14層と18層で検出されているがいずれも低い密度である。

（２）Ⅱ区SD01

イネは20層の上下、21層下部、22層、23層の上下、26層で検出されている。20層と26層では高い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型の各分類群はすべての試料で検出されている。このうち、ヨシ属は20層下部、21層上部、23層上部および26層で、スキ属型は26層を除く各層で、メダケ節型は20層の上下、21層の上下、22層で、ネザサ節型はすべての層でそれぞれ高い密度である。ミヤコザサ節型は20層上部、21層の上下、22層上部で検出されているがいずれも低い密度である。また、26層でシバ属が認められたが低い密度である。

5．考察

イネのプラント・オパールが検出されたのは、Ⅰ区SD04では、14層、18層および20層の３層準、Ⅱ区SD01では20層上下、21層の下部、22層、23層上下および26層の各層準である。このうち、Ⅰ区SD04の18層、Ⅱ区SD01の20層と26層ではプラント・オパール密度が3,600～5,400個/gと高い値であり、いずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを上回っている。こうしたことから、これらの層準の堆積時は調査地の近傍において稲作が営まれていた可能性が極めて高いと考えられる。その他の層準については、プラント・オパール密度が1,000個/g前後と低いことから、近傍で稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。仮にこれらの層準の時期に稲作が営まれていたとするならば、耕作域はやや遠方でそこからプラント・オパールが流入したか、あるいは、稲作の行われた期間が短かった、稲藁の多くが耕作地から持ち出されていた、イネの生産性が低かった、土層の堆積速度が速かった、などが想定される。

イネ以外の分類群の検出状況をみてみると、Ⅰ区SD04の18層、Ⅱ区SD01の20層下部、21層上部、22層、23層上部、26層でヨシ属が高い密度で検出されており、それぞれ優勢となっている。したがって、これら各層準の堆積時は調査地周辺はヨシの生育する湿地の環境であったと推定される。その他では、ススキ属型、メダケ節型およびネザサ節型も各層準で概ね高い密度である。こうしたことから、これらの層準は周辺にススキ属、メダケ節およびネザサ節なども生育する開けた環境であったと推定される。

6．まとめ

今津中原遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、Ⅰ区SD04地点の18層、Ⅱ区SD01地点の20層と26層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、これらの層準の堆積時に調査地の近傍において稲作が営まれていた可能性が示唆され、

Ⅰ区SD04、Ⅱ区SD01は稲作に伴う水路であった可能性が認められた。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

＜付記＞　香川県埋蔵文化財センター

試料提出後の整理作業の過程で遺構番号と層位番号を下記のように変更しており、また全体編集のため株式会社古環境研究所から納品した文章中の表番号、挿図番号、キャプションを一部変更している。その他は変更していないので、下記のように変更して読み取っていただきたい。

遺構番号

Ⅰ区ＳＤ04　→　ＳＤ03
Ⅱ区ＳＤ01　→　ＳＤ04

Ⅱ区ＳＤ01の層位番号

20層　→　13層、　21層　→　14層、　22層　→　15層、　23層　→　16層、　26層　→　19層

検出密度（単位：×100個/g）

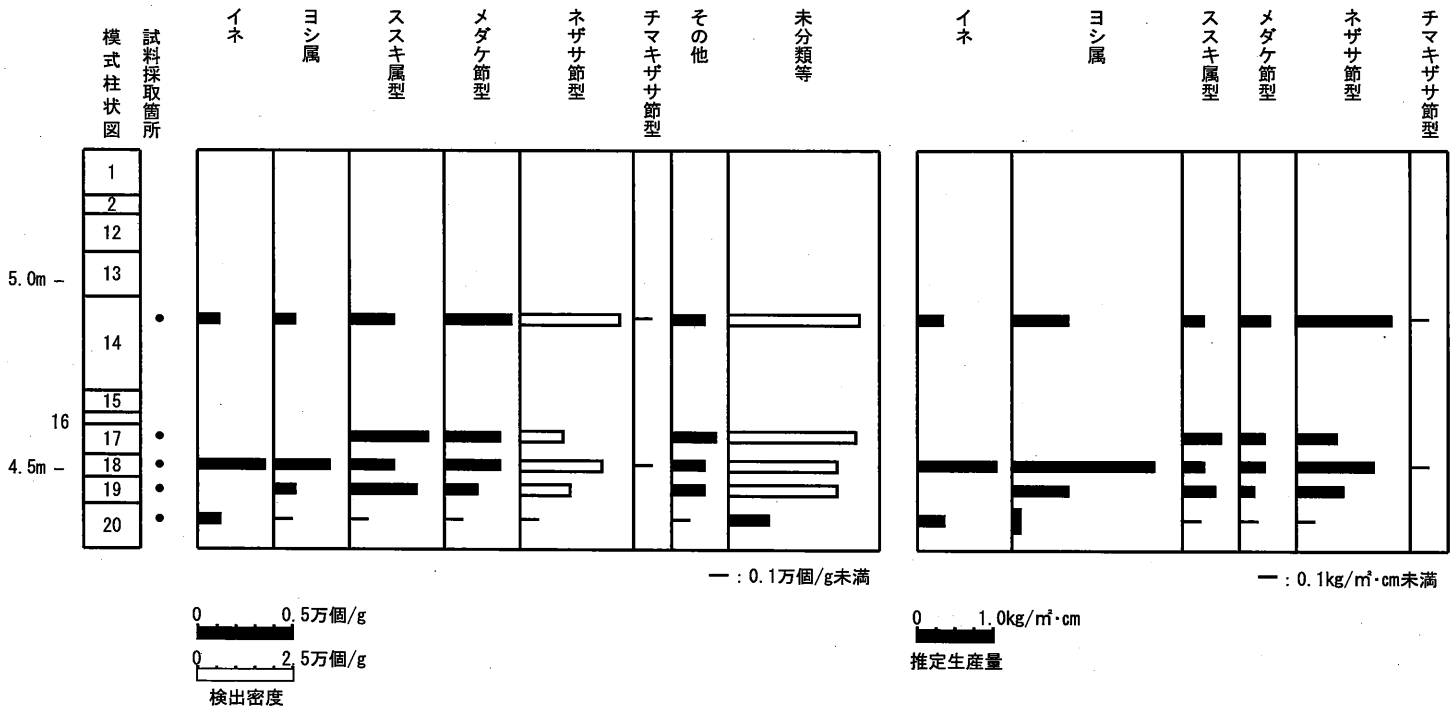
分類群（和名・学名）＼試料		I区SD04					II区SD01							
		14	17	18	19	20	20-1	20-2	21-1	21-2	22	23-1	23-2	26
イネ科	Gramineae (Grasses)													
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	12		36		3	48	30		18	12	12	6	54
ヨシ属	Phragmites (reed)	12		30	12	2	12	36	24	6	18	30	12	36
ススキ属型	Miscanthus type	24	42	24	36	3	114	180	90	54	66	60	72	36
シバ属	Zoysia													12
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)													
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	36	30	30	18	3	127	72	192	176	121	60	36	24
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	264	114	216	132	6	361	385	456	284	301	108	114	114
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	6		6				6	12	12	12	12		6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi						6		6	12	12			
その他	Others	18	24	18	18	2	12	18	18	24	12	12	12	24
未分類等	Unknown	347	337	288	288	22	295	439	354	266	277	331	400	329
プラント・オパール総数		719	547	648	504	41	975	1166	1152	852	831	625	652	635

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

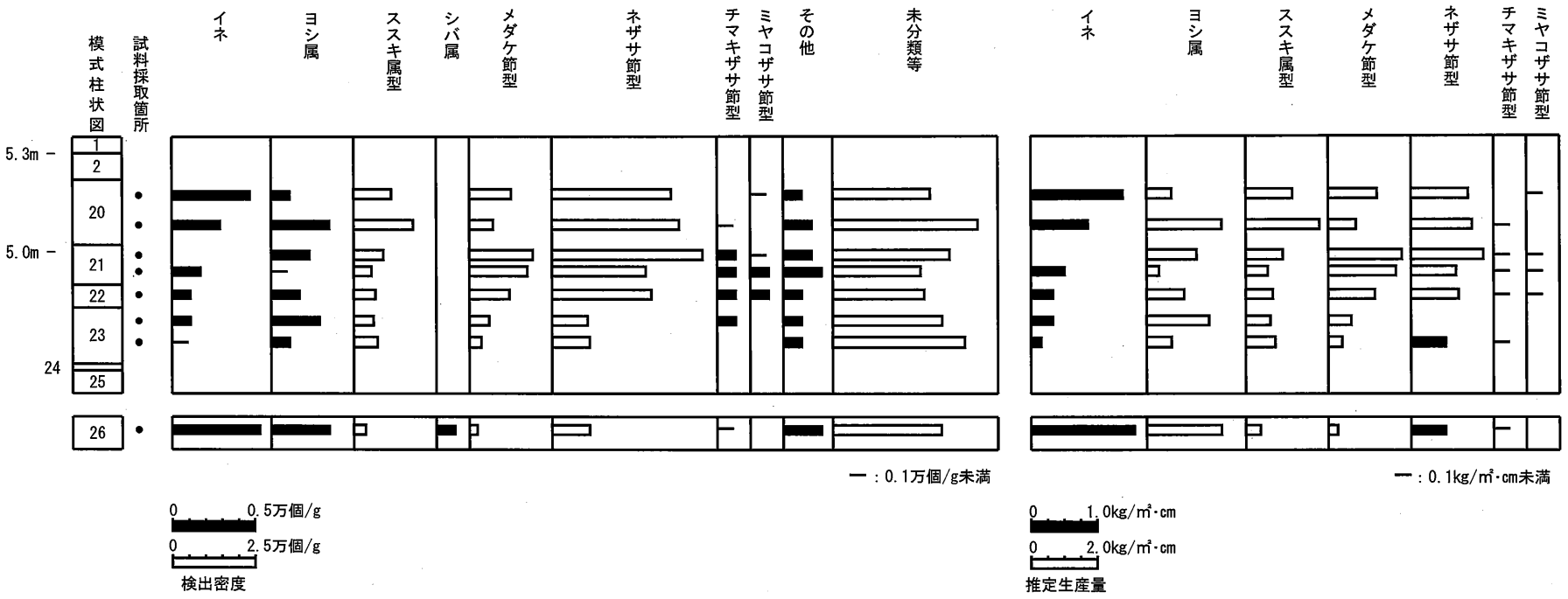
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.35		1.06		0.09	1.42	0.88		0.53	0.35	0.35	0.18	1.58
ヨシ属	Phragmites (reed)	0.76		1.89	0.76	0.11	0.76	2.28	1.52	0.38	1.14	1.90	0.75	2.26
ススキ属型	Miscanthus type	0.30	0.52	0.30	0.45	0.04	1.42	2.24	1.12	0.68	0.82	0.75	0.89	0.44
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.42	0.35	0.35	0.21	0.03	1.47	0.84	2.23	2.04	1.40	0.70	0.42	0.28
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	1.27	0.50	1.04	0.63	0.03	1.73	1.85	2.19	1.37	1.45	0.52	0.55	0.55
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.04		0.04				0.05	0.09	0.09	0.09	0.09		0.04
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi						0.02		0.02	0.04	0.04			

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

第３表　香川県　今津中原遺跡におけるプラント・オパール分析結果

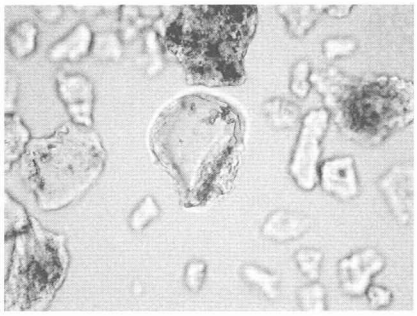


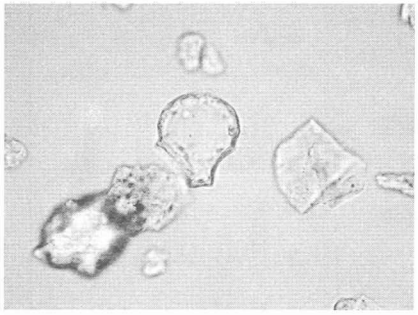
第25図　ＳＤ03地点のプラント・オパール分析結果

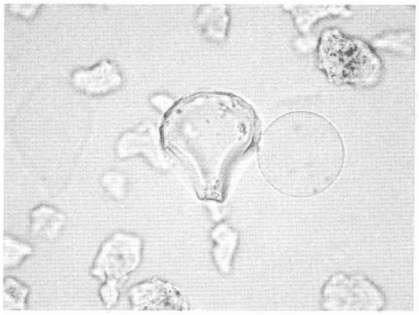


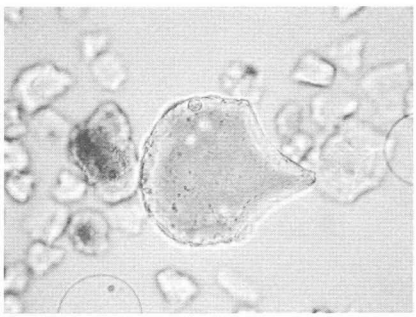
第26図　ＳＤ04地点のプラント・オパール分析結果

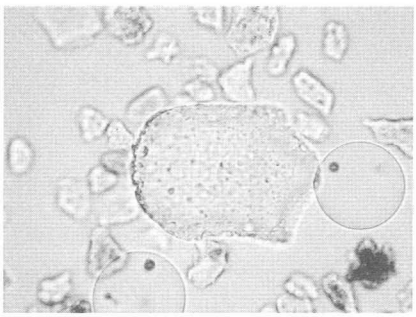
プラント・オパールの顕微鏡写真

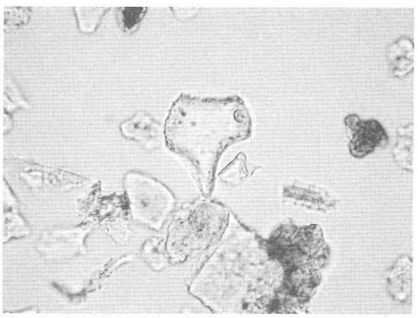

イネ

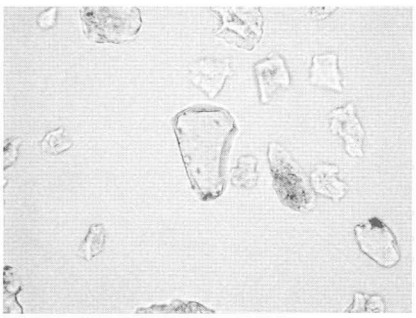

イネ

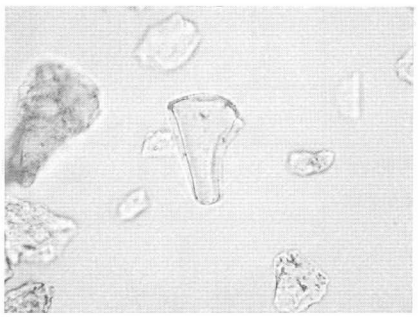

イネ

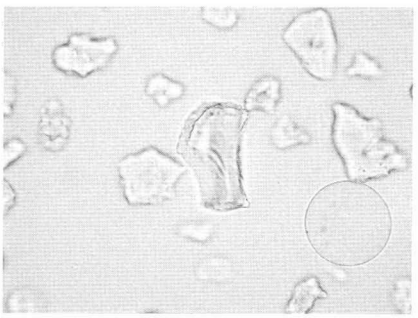

ヨシ属

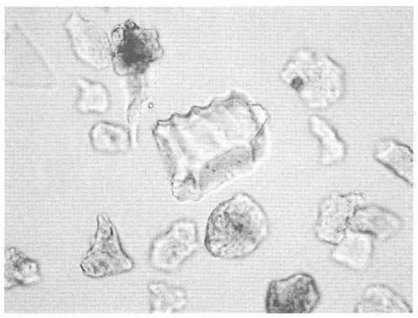

ヨシ属

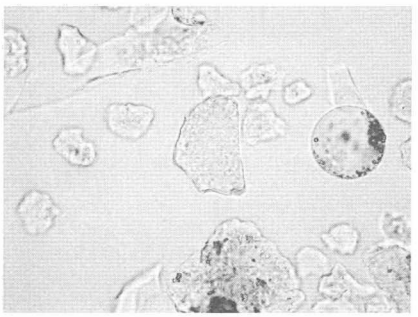

シバ属

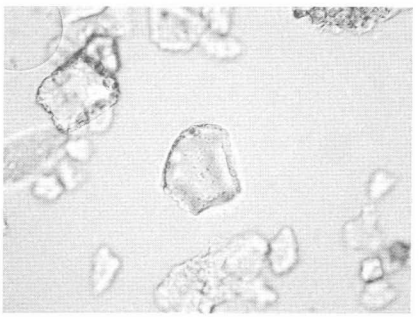

ススキ属型


ススキ属型


メダケ節型


ネザサ節型


チマキザサ節型


ミヤコザサ節型

50 μm

第27図　プラント・オパールの顕微鏡写真

第５章　まとめ

遺構の変遷（第28図）

＜弥生時代前期＞　ＳＤ01・ＳＤ02

Ｉ区の東端で検出した溝状遺構である。先述したように弥生時代前期の可能性があるが、遺物の出土量は少ない。今津中原遺跡の南西1.2㎞の場所には弥生時代前期の環濠集落である中の池遺跡があるなど、今津中原遺跡を含めた周辺地域では弥生時代前期段階ですでに人々が開発を試みた様子が窺える。

＜弥生時代後期＞　ＳＤ03・ＳＤ04・ＳＸ01

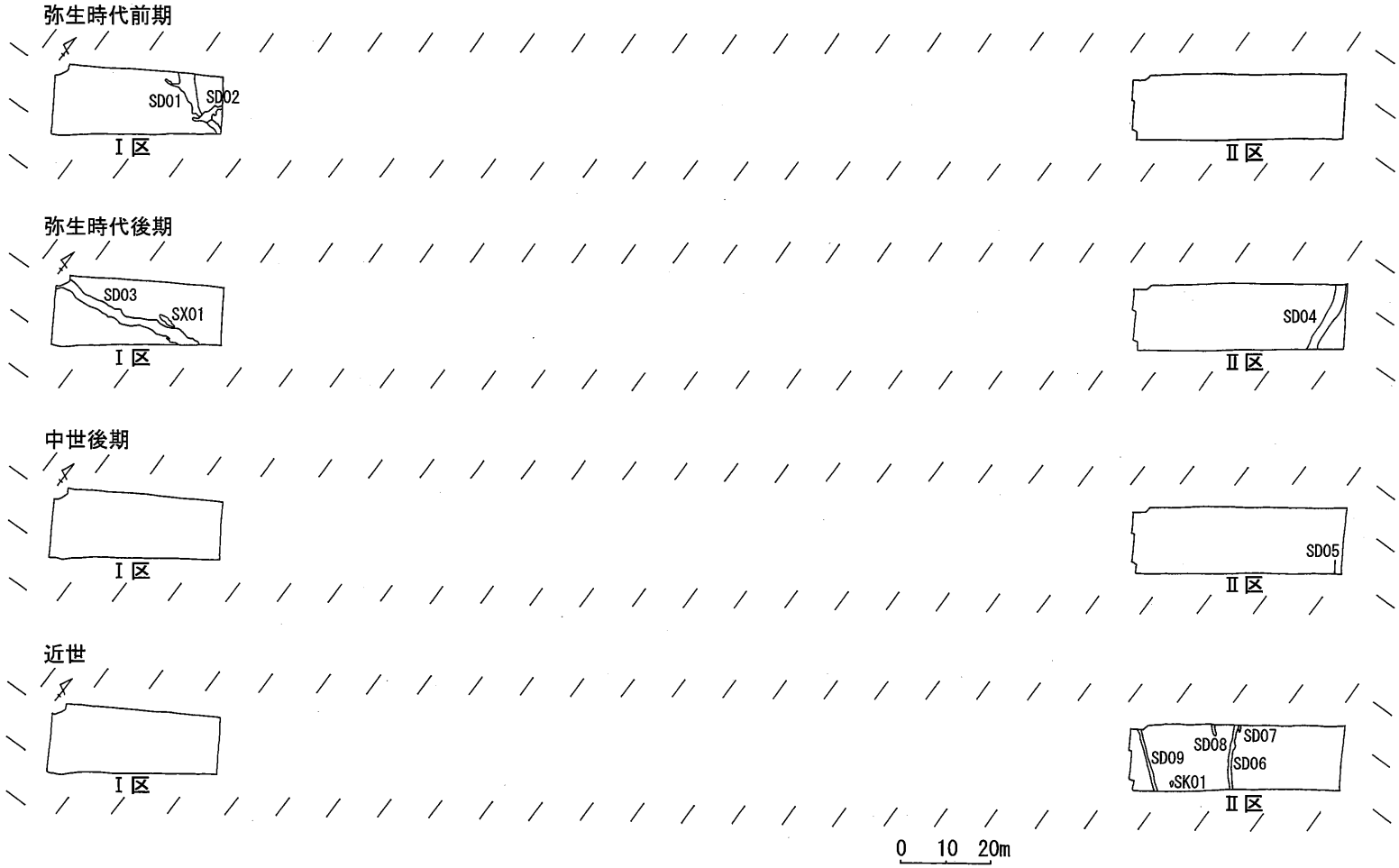
Ｉ区のほぼ全体とⅡ区の東端で検出した溝状遺構及びＩ区で検出した不明遺構がある。ＳＤ03・04ともに埋土を再掘削して維持・管理に努めている。また両者とも僅かに蛇行するものの全体的には直線的で幅もほぼ一定になっており、基幹となる灌漑水路と考えられるものである。ＳＤ03・04が掘削されている一帯は、大部分の遺構面が現耕作土直下で地山となり、微高地の縁辺部に相当している。今津中原遺跡周辺は金倉川や西汐入川を中心とした旧流路が枝状に広がり瀬戸内海に注ぐ手前の低地である。今津中原遺跡では検出されなかったものの、ＳＤ03・ＳＤ04の埋土からイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことからも、周囲の旧流路跡や沖積部分などを利用して水田が造られていた可能性は高い。そして当時の流路（河川）から導水して水田に水を流し込み、その後また流路（河川）に排水する水路の存在が考えられ、ＳＤ03・ＳＤ04もこのような灌漑水路と考えられる。

＜中世後半＞　ＳＤ05

Ⅱ区の南東隅で部分的に検出した溝状遺構である。当該期の遺構はＳＤ05だけで、中世後半段階に掘削され近世前半頃まで機能していたと考えられ、主軸方位はＮ－31°－Ｗで丸亀平野の条里地割の方向に合致している。

＜近世＞　ＳＫ01・ＳＤ06・ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＤ09

近世の遺構はすべてⅡ区で検出している。土坑１基と溝状遺構が４条ある。このうちＳＤ06とＳＤ09は調査区を北西－南東方向に直線的に縦断している。しかし幅は両者とも１ｍ未満で、深さも0.1ｍ前後と浅く、長さの割には小規模な溝状遺構である。ＳＤ06の主軸方向はＮ－28°－Ｗで丸亀平野の条里地割の方向に合致している。



第28図　遺構変遷図（1/1500）

遺物観察表・土器

報文番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調・外	色調・内	調整・外	調整・内	胎土	報告書遺構名	備考
6	弥・壺	—	—	11.4	1/8	にぶい橙7.5YR6/4	浅黄橙10YR8/3	マメツ	マメツ	細・多	SD02	
8	弥・壺	—	—	9.6	1/8	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR7/1	ナデ、マメツ	ナデ、マメツ	細・多	SD03	
9	弥・甕	—	—	4.8	3/8	にぶい黄橙10YR6/4	灰黄褐10YR6/2	マメツ、板ナデ後ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ後ナデ	細・普	SD03	
10	弥・甕	15.8	25.0	3.6	3/8	淡橙5YR5/4	浅黄橙7.5YR8/3	指押さえ後ハケ目、タタキ後ハケ目、ナデ	ナデ、ハケ目、指押さえ、ヘラケズリ	細・多	SD03	
14	弥・鉢	16.2	—	—	2/8	褐灰10YR4/1	にぶい褐.5YR5/4	ヨコナデ、ナデ、マメツ	ヨコナデ、指押さえ後ナデ、マメツ	細・少	SD04	
15	弥・鉢	22.0	—	—	1/8	灰白10YR7/1	灰白10YR8/2	ヨコナデ、指押さえ後ナデ	ヨコナデ、板ナデ、ナデ	細・少	SD04	
16	土・小皿	7.4	—	—	1/8	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	回転ナデ	回転ナデ	微・少	SD04	
17	土・捏鉢	28.8	—	—	1/8	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙10YR8/3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	細・普	SD05	
18	土・土鍋	22.0	—	—	1/8	灰黄褐10YR6/2	橙7.5YR7/6	ヨコナデ、板ナデ、ナデ	ヨコナデ、板ナデ	細・少	SD05	
19	土・土鍋	—	—	—	細片	褐灰10YR6/1	にぶい黄橙10YR7/2	ヨコナデ、板ナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	中・少	SD05	
21	弥・壺	19.2	—	—	1/8	橙2.5YR6/6	黒褐10YR3/1	ヨコナデ、ナデ、マメツ	ヨコナデ、ハケ目	中・少	SD06	
22	磁・碗	11.0	—	—	1/8	灰白N8/	灰白N8/	回転ナデ	回転ナデ	緻密	Ⅱ区包含層	肥前系
23	磁・碗	—	—	—	細片	灰白N8/	灰白N8/	回転ナデ	回転ナデ	緻密	Ⅱ区包含層	肥前系

遺物観察表・石器

報文番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	報告書遺構名	備考
1	砥石	11.45	7.0	6.4	563.15	砂岩	SD01	
2	砥石	6.05	5.4	1.5	50.33	安山岩	SD01	
3	砥石兼敲石	9.4	8.9	5.2	481.82	砂岩	SD01	
4	敲石兼砥石兼磨石	13.8	8.0	5.8	796.76	砂岩	SD01	
5	砥石	21.3	16.4	8.3	5,000.00	安山岩	SD01	
7	石核	7.8	4.4	2.0	66.81	サヌカイト	SD02	
11	石鏃	1.6	2.3	0.3	1.02	サヌカイト	SD03	凹基
12	打製石庖丁	5.2	4.85	7.05	26.28	サヌカイト	SD03	
13	石鏃	6.8	7.5	1.7	132.33	サヌカイト	SD03	
20	砥石	8.9	8.95	4.0	526.68	砂岩	SD05	
25	剥片	3.9	3.0	0.55	5.82	サヌカイト	Ⅱ区包含層	加工痕有り
26	打製石庖丁	7.0	4.65	0.9	27.7	サヌカイト	Ⅱ区包含層	
27	スクレイパー	7.6	4.2	0.9	31.39	サヌカイト	Ⅱ区包含層	
28	剥片	2.3	1.5	0.35	1.83	サヌカイト	Ⅰ区包含層	

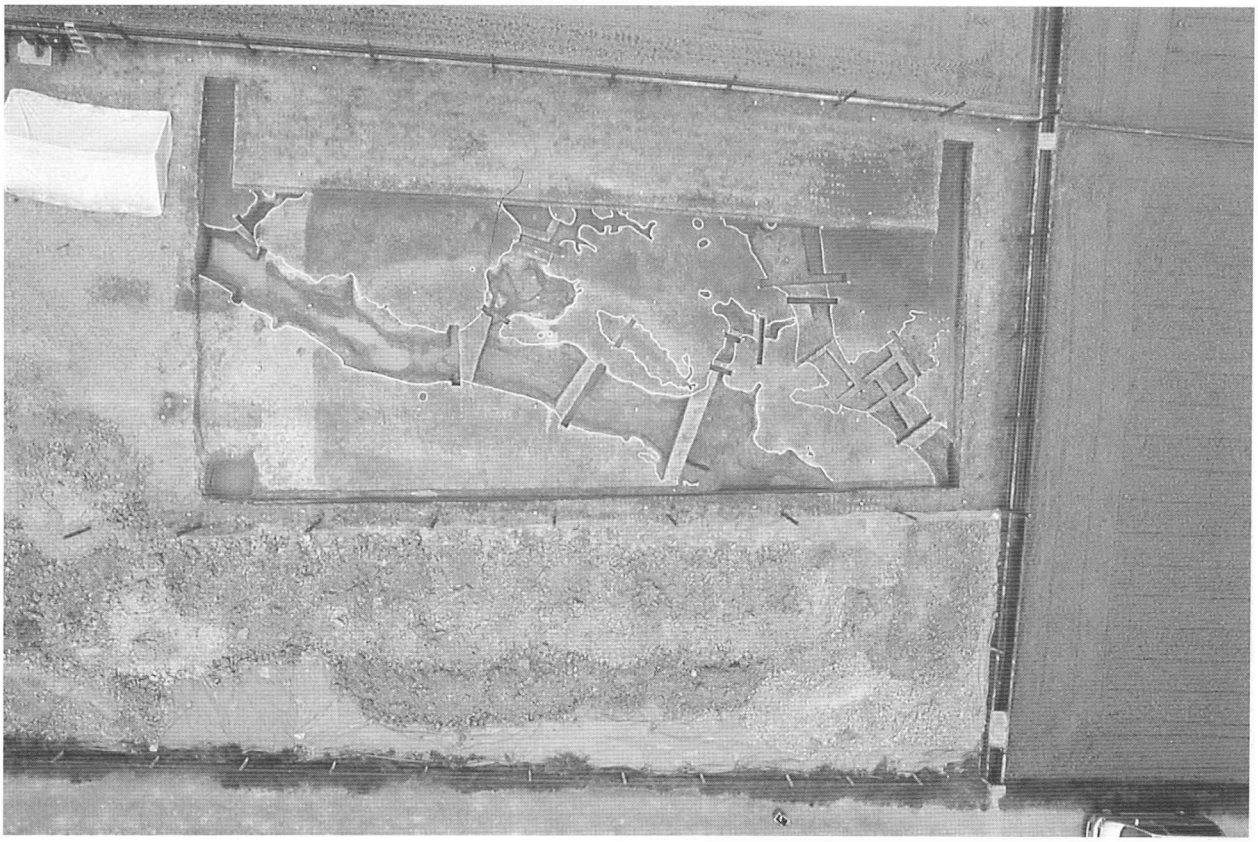
遺物観察表・鉄器

報文番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	報告書遺構名	備考
24	釣針状鉄製品	3.2	0.8	0.35	Ⅱ区包含層	

調査区遠景　西から　遠方に丸亀城

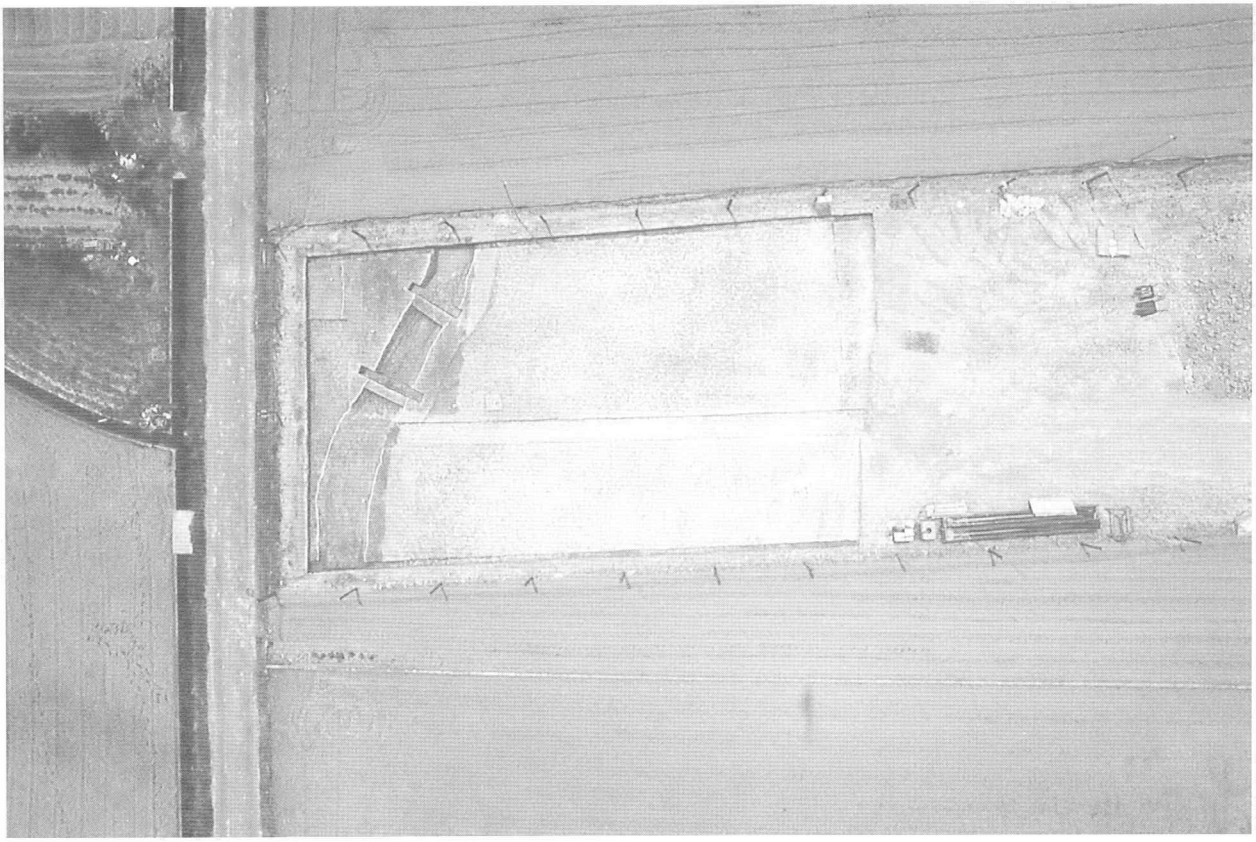
調査区遠景　北東から　遠方のため池は先代池

図版２



Ⅰ区全景　調査前半段階　南から

Ⅰ区全景　調査後半段階　南から



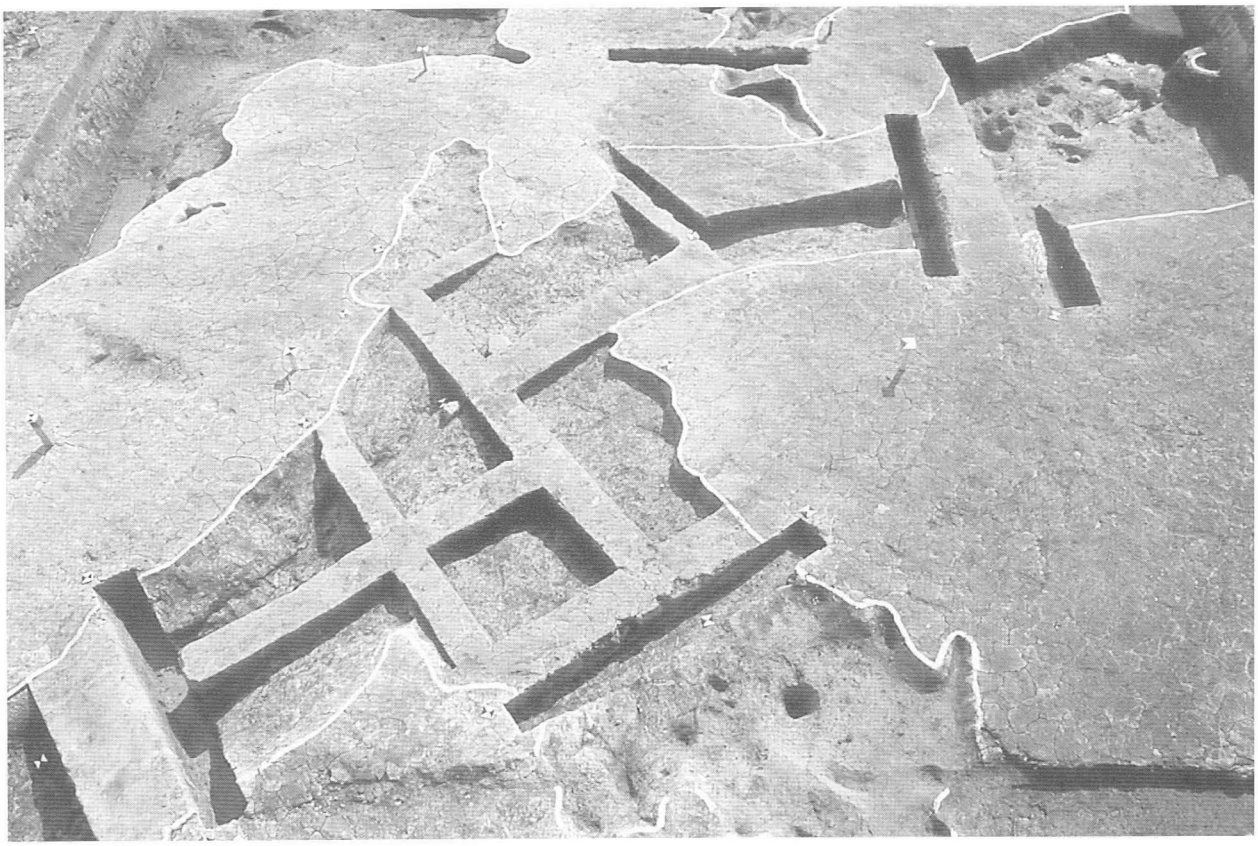
Ⅱ区東半部全景　北から

Ⅱ区西半部全景　北から

図版４

Ⅰ区北壁土層　南東から

Ⅱ区北壁土層　南東から



ＳＤ01･02全景　調査前半段階　東から

ＳＤ01･02･03　南西から

図版６

ＳＤ03全景　東から

ＳＤ03全景　西から

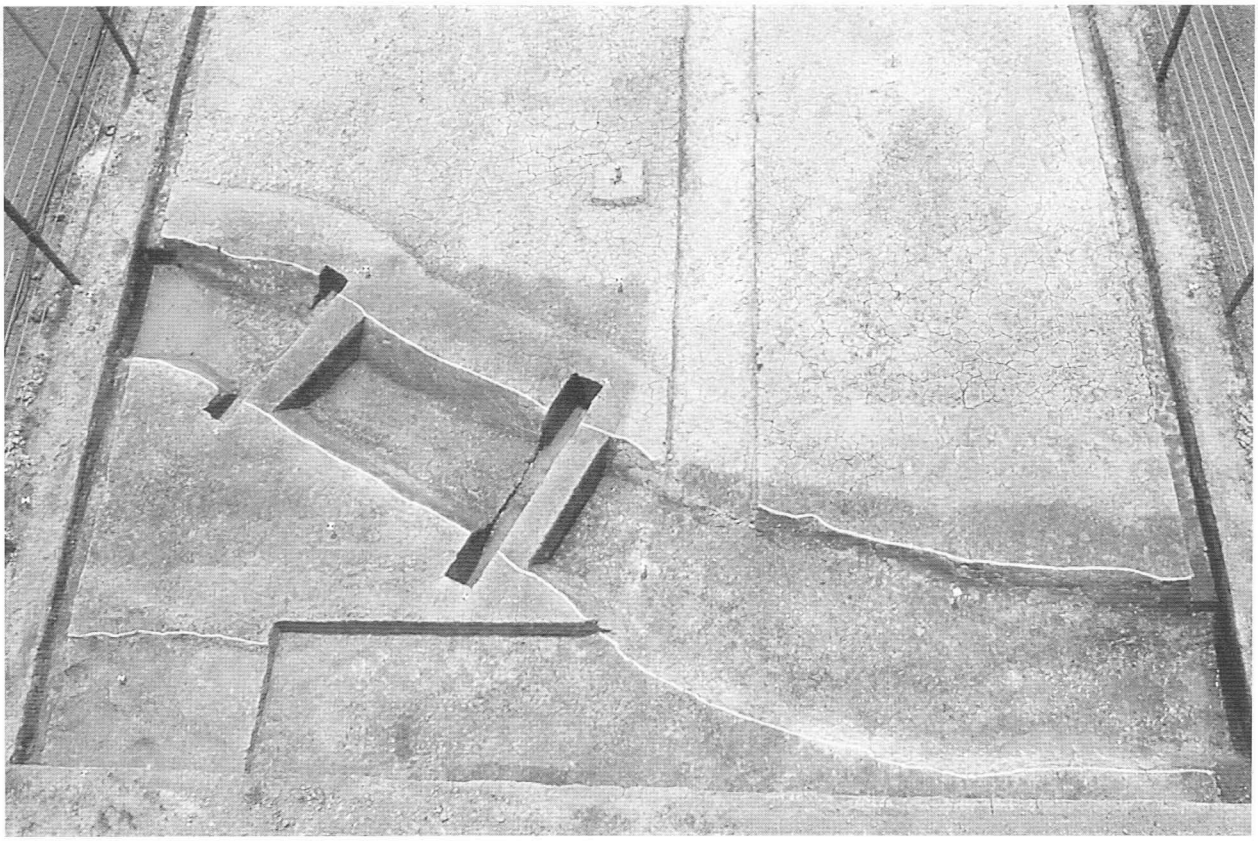
ＳＤ03土層断面　Ａ－Ａ’　東から

ＳＤ03土層断面　Ｂ－Ｂ’　東から

図版８

ＳＤ03土層断面　C-C’　東から

ＳＤ03土層断面　Ｃ－Ｃ’近景　東から



ＳＤ04･05全景　東から

ＳＤ04土層断面　Ａ－Ａ’　南から

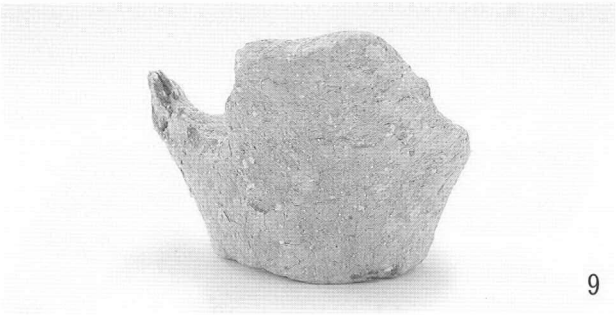
図版10

ＳＤ04土層断面　B－B’　南から

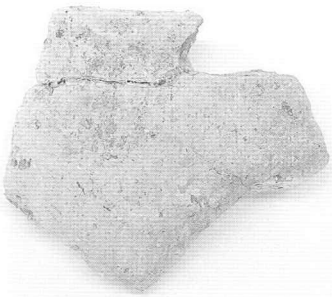
ＳＤ09全景　西から

6

10

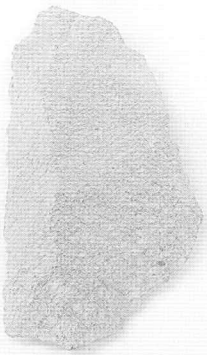


9

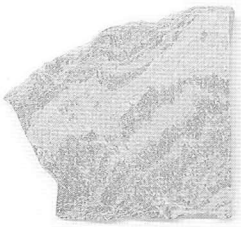


15

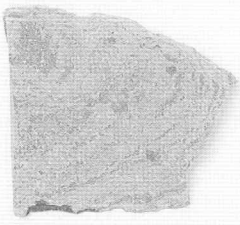
7



7



12

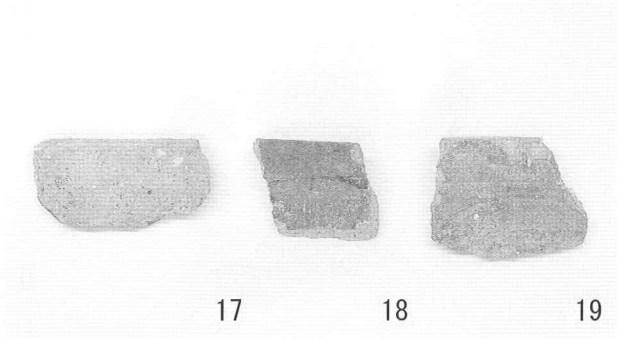


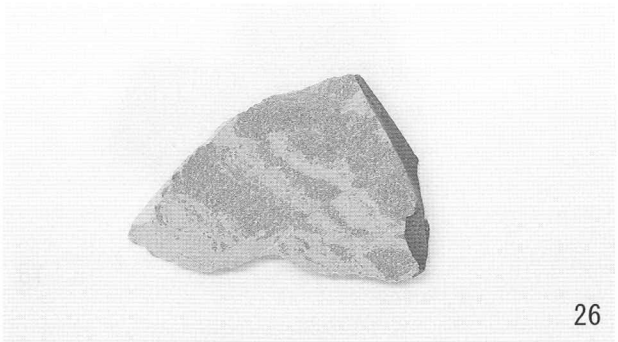
12

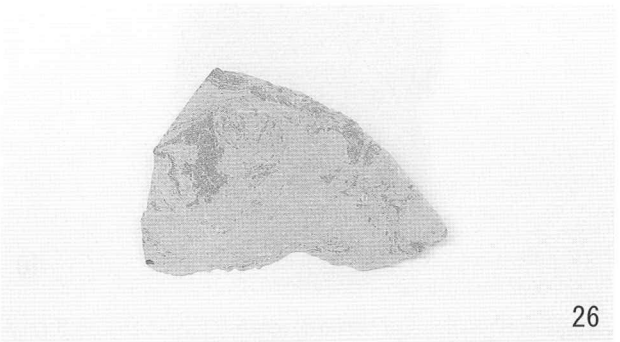
13

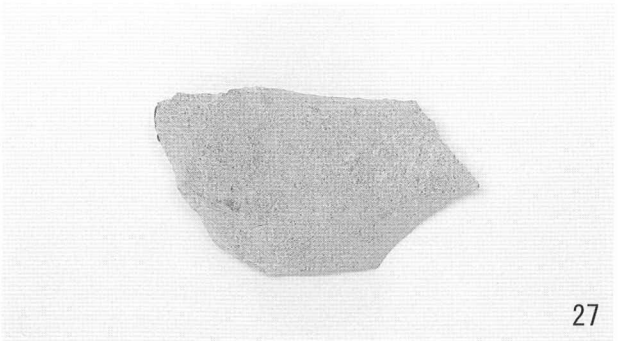
13

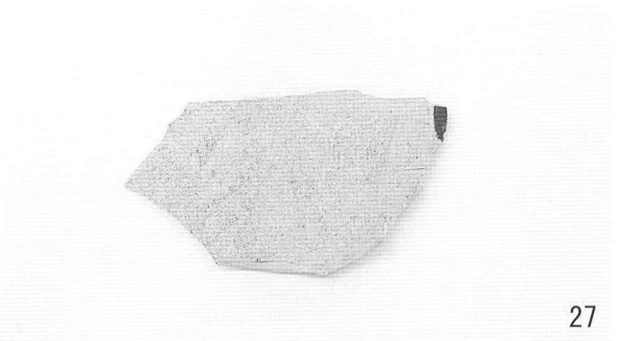
図版12











報 告 書 抄 録

ふりがな	いまづなかはらいせき
書名	今津中原遺跡
副書名	県道多度津丸亀線緊急地方道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	森　格也
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4　TEL　0877-48-2191
発行機関	香川県教育委員会
発行年月日	2007（平成19）年９月28日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	CD-ROM枚数
57P	８P	36P	１P	12P	28枚	36枚	０枚	０枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″ (世界測地系)	東経 °′″ (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いまづなかはらいせき 今津中原遺跡	かがわけん 香川県 まるがめし 丸亀市 いまづちょう 今津町	37202		34° 16′ 33″	133° 47′ 21″	2001.4. 1 ～ 2001.6.30	1530㎡	県道多度津 丸亀線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今津中原遺跡	集落	弥生時代 前期	溝状遺構	弥生土器・石器	
		弥生時代 後期	溝状遺構・小穴・不明遺構	弥生土器・石器	
		室町時代	溝状遺構	土師質土器・陶器	
		江戸時代	溝状遺	陶器・磁器	

県道多度津丸亀線緊急地方道整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

今津中原遺跡

平成19年9月28日発行

編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4
TEL　0877-48-2191
FAX　0877-48-3249

発行　香川県教育委員会
印刷　四国工業写真株式会社